



77218

635

目次



五、記念寫眞頒布の趣旨……………一

六、宣戦ノ詔勅……………一

七、平和克復の詔勅……………四



八、日露戰役概説 …… 七

    自第一章 開戰及聯合艦隊の極東海上制壓  
    至第十二章 終 結

九、奉天大會戰と日本海々戰の彼我勢力比較表及其の戰績 …… 五一

一〇、日露役に於ける陸海軍の戰歿者統計表 …… 五九

一一、日露兩軍々艦損失比較表 …… 六一

一二、戰時日報 …… 七一

一三、戰時の財政 …… 八五

一四、戰に因める明治天皇及昭憲皇太后の御製御歌(十九首) …… 九一

一五、乃木將軍其他の詩(二十七首) …… 九七

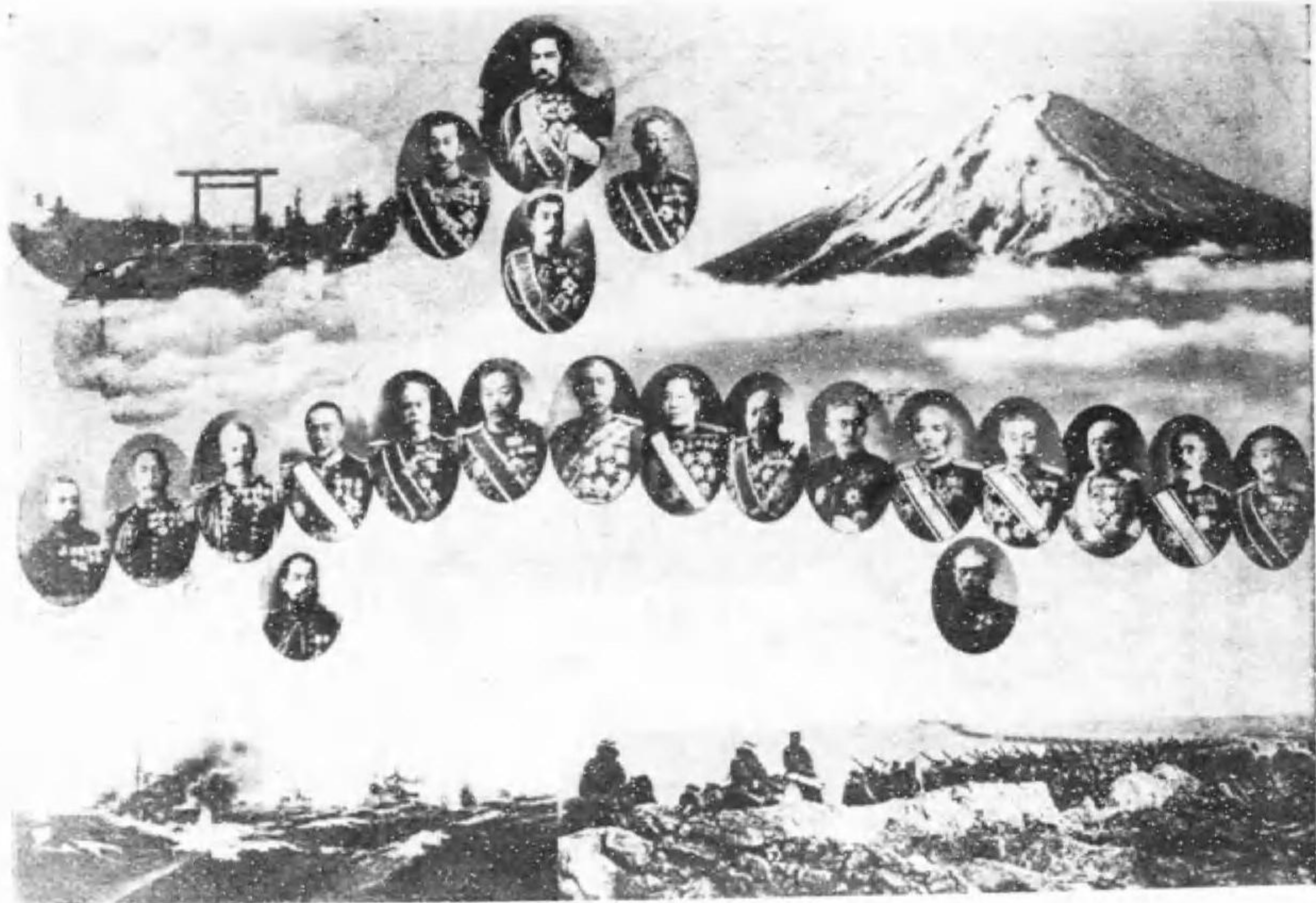
記念寫眞頒布ノ趣旨

東洋永遠ノ平和ヲ確保シ延テハ世界ノ公道ヲ保全セントノ崇高ナル信念ニ基キ敢然起テ  
 雄大ナル露西亞ト戰ヒ交戦實ニ貳拾餘ヶ月拾餘萬ノ尊キ生靈ヲ喪ヒ貳拾餘億ノ財貨ヲ抛  
 チ遂ニ大捷ヲ博シテ 皇威ヲ世界ニ宣揚シ以テ一躍世界ノ大國トナリ今ヤ 確  
 乎タル信念ノ下ニ東洋平和ノ礎石ヲ築キ以テ日露大戰ノ偉業ヲ擴充シ肇國ノ大精神ヲ紹  
 述シ眞日本實現ニ進ミツト堂々世界ニ雄飛スルニ至レリ。

願 皇祖國礎ヲ檀原ニ奠メ給ヒシヨリ悠久茲ニ二千五百六拾有餘年其間  
 征韓ノ師、元寇ノ難風ニ 皇威ヲ隣邦ニ宣揚シ日清ノ役新ニ國力ヲ顯彰シ叢爾  
 タル極東ノ一島帝國ヲ以テ漸次世界ニ重キヲナスト雖モ唯其事局東洋ニ劃セラレタルニ  
 過キス然ルニ日露戰役ハ其戦局歐露ヨリ北亞大陸四千七百哩ヲ横絶シテ滿洲ニ達シ波羅  
 的海ヨリ一萬四千里ヲ縱貫シテ「オコツク」海ニ至リ殆ント東半球ノ海陸全面ニ亘リ  
 貔貅百萬陸上ニ相撃チ艦艦二百隻海洋ニ相戰フ實ニ未曾有ノ偉觀我國開闢以來無比ノ國

難ニシテ空前ノ大戦役タリシノミナラズ世界歴史上稀ニ見ル大戦タリシト云フヘシ。  
 謹而按スルニ斯ノ如キ大戦ニ當リ海陸戦共ニ我軍克ク勝ヲ制シタル所以ノモノ固ヨリ歴  
 代神靈ノ御加護ト  
 明治大帝ノ御稜威エヨルコトハ勿論ナリト雖モ抑モ亦忠勇  
 ナル陸海軍將士ノ能ク其職分ヲ盡セルト熱烈火ノ如キ銃後ノ國民カ舉國一致ノ忠誠ヲ致  
 セシニ外ナラズ然モ能ク統帥ノ大任ヲ全フシ滿洲ノ曠野ニ百萬ノ大敵軍ヲ撃破シテ敵帥  
 「クロバトキン」ヲ走ラセ又起ツコト能サラシメタル大山滿洲軍總司令官以下各將軍ノ  
 大勲業ト海ニ敵ノ大艦隊ヲ撃滅シ世界ノ海戦史ヲ光輝アラシメ其名聲ヲ恣ニシタル古  
 今ノ名提督東郷聯合艦隊司令長官以下ノ大勲業トハ史上其例ヲ見ス、殊ニ日本海ニ於テ  
 敵ノ精銳波羅的艦隊ヲ殲滅シタル所謂日本海々戰ハ奉天大會戰ト共ニ永ク世界ノ戦史ヲ  
 飾ルモノト云フヘク名將勇兵ノ殘シタル大勲業ハ大戦ノ鴻業偉績ト共ニ特筆シテ之レヲ  
 青史ニ留メ大書シテ之レヲ不朽ニ傳ヘラル誠ニ我日東帝國歴史ノ光輝ト云フヘク中ニモ  
 首山堡ノ激戦ニ苦戰奮闘遂ニ悲壯ナル戦死ヲ遂タル橋中佐ト旅順港外ニ於テ唯一片  
 ノ肉塊ヲ留メテ壯烈無比ノ最後ヲ遂ケニシ閉塞船指揮官廣瀨中佐トノ忠勇義烈ハ萬世不

滅ノ光彩ヲ宇内ニ輝カセ千秋ニ儒夫ヲ起タシムルノ好鑑ヲ殘シタルモノニシテ軍神ト仰  
 ガルモ洵ニ偶然ニアラス實ニ兩中佐死ストモ其ノ英靈ハ死セスト云フヘシ。  
 嗚呼曠古ノ大義戰銷サレテヨリ早クモ春風秋雨三十星霜大平洋ノ波ハ靜ニ富嶽ノ秀峰ハ  
 依然トシテ東海ノ空ニ聳ユルト雖モ  
 明治大帝神去リマシ當時ノ偉勳者殆ント  
 護國ノ神ト化シ英姿ヲ仰クニ由モナシ今ヤ功酬ヒラレテ朗ニ明行ク滿蒙ノ天地日ト共ニ  
 伸ヒ行ク滿洲新帝國ノ現情ニ想ヲ致ス時誰レカ又無限ノ感慨無キヲ得ンヤ。  
 回顧スレハ戦後歐洲大戦ノ參加日支事變其他幾多ノ聖戰ヲ經ル毎ニ國威愈々輝キ軍備又  
 益々充實シ國力日ト共ニ伸ヒ異狀ナル商工業ノ大發展ト相俟チテ今ヤ一大飛躍ノ途上ニ  
 アルモ喬木風多ク國際關係ハ日ニ復雜ヲ極メ寸隙ヲ容レス曩ニ聯盟ノ脱退アリ今又華府  
 條約廢棄通告ノ壯舉ヲ斷行シ來ルヘキ倫敦海軍々縮會議ヲ控ヘ更ニ「サヴエート」聯  
 邦ノ現狀ヲ考察シ此處ニ紀元二千五百九十五年ノ國際危機ニ直面シテ内外愈々多事ナ  
 ラントシツツアリ。  
 此ノ未曾有ノ重大時局ニ處シ全國民上下一致精神ノ振興ヲ計リ能ク難關ヲ突破シテ國家



百年ノ大計ヲ確立シ天壤無窮ノ  
 ラス、國事多難ノ秋而シテ偉材ヲ憶フ事眞ニ切ナリ茲ニ日露役第三十周年ヲ迎ヘ躍進日  
 本ノ非常時ニ第一歩ヲ入ル、ニ方リ宏大ナル  
 十年前ノ大國難ヲ回想シテ眞ニ君臣一致見事ニ突破シタル大鴻業ヲ想起シ深ク國民ノ腦  
 裡ニ印シ偉人ノ大勳業ヲ偲ブト共ニ廣漠タル滿洲ノ野ニ又ハ渺茫限ナキ太平洋ニ護國ノ  
 鬼ト化シタル將兵各位ノ尊キ英靈ニ對シ心カラナル弔意ヲ表シ益々國民忠愛ノ念ヲ熾烈  
 ナラシムルト共ニ永ク後進誘導ノ資ニ供スルノ目的ヲ以テ  
 明治大帝ト金枝玉葉ノ尊キ御身ニテ國難ニ當ラセ給ヒシ  
 謹寫シ奉リ之レニ陸海軍統帥官ノ英姿並ニ奉天大會戰ト日本海々戰、靖國神社トヲ配  
 シタル莊嚴ニシテ一見日露大戰ヲ髣髴タラシムル記念寫眞ヲ作成シ廣ク頒布スルノ計畫  
 ヲ企テタリ滿天下ノ同邦諸君庶幾ハ光輝アル國史ノ上ニ立テル國民トシテ此ノ舉ニ御  
 共鳴御賛同アラシムコトヲ。

雲峰 富士山

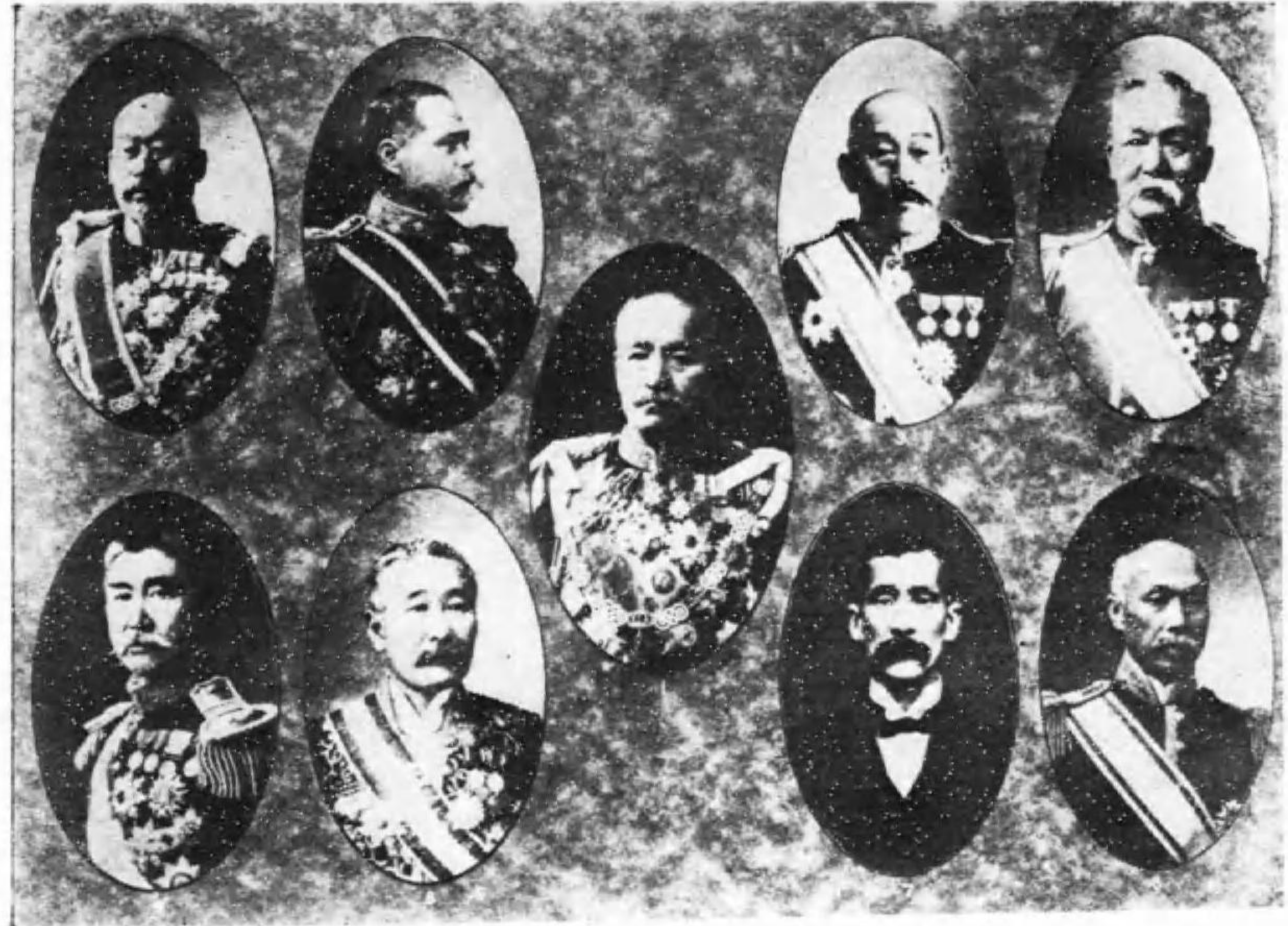
伏見宮貞愛親王殿下

明治大帝 閑院宮載仁親王殿下

有栖川宮威仁親王殿下

靖國神社

- |                 |                |                 |               |                |                   |              |                 |              |                    |              |                 |                 |                 |                 |
|-----------------|----------------|-----------------|---------------|----------------|-------------------|--------------|-----------------|--------------|--------------------|--------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 鴨綠江軍司令官<br>川村大將 | 第三軍司令官<br>乃木大將 | 滿洲軍總參謀長<br>兒玉大將 | 第二軍司令官<br>奧大將 | 第一軍司令官<br>黑木大將 | 第四軍司令官<br>野津大將    | 陸軍大臣<br>寺內大將 | 滿洲軍總司令官<br>大山元帥 | 參謀總長<br>山縣元帥 | 軍令部長<br>伊東元帥       | 海軍大臣<br>山本大將 | 聯合艦隊司令官<br>東鄉大將 | 第三艦隊司令官<br>片岡中將 | 第二艦隊司令官<br>村上中將 | 第四艦隊司令官<br>出羽中將 |
|                 |                |                 | 大隊長<br>橋中佐    |                | 奉天大會戰<br>三月九日ノ追擊戰 |              |                 |              | 日本海大海戰<br>五月廿七日大海戰 |              | 閉塞船指揮官<br>廣瀬中佐  |                 |                 |                 |



内閣總理大臣	兼内務大臣	伯爵 桂 太 郎
司法大臣		波多野敬直
農商務大臣		男爵 清 浦 奎 吾
海軍大臣		男爵 山本權兵衛
陸軍大臣		寺 内 正 毅
文部大臣		久保田 讓
外務大臣		男爵 小村壽太郎
大藏大臣		男爵 曾 禰 荒 助
遞信大臣		大 浦 兼 武

(總力履行官兼大臣)

說 明

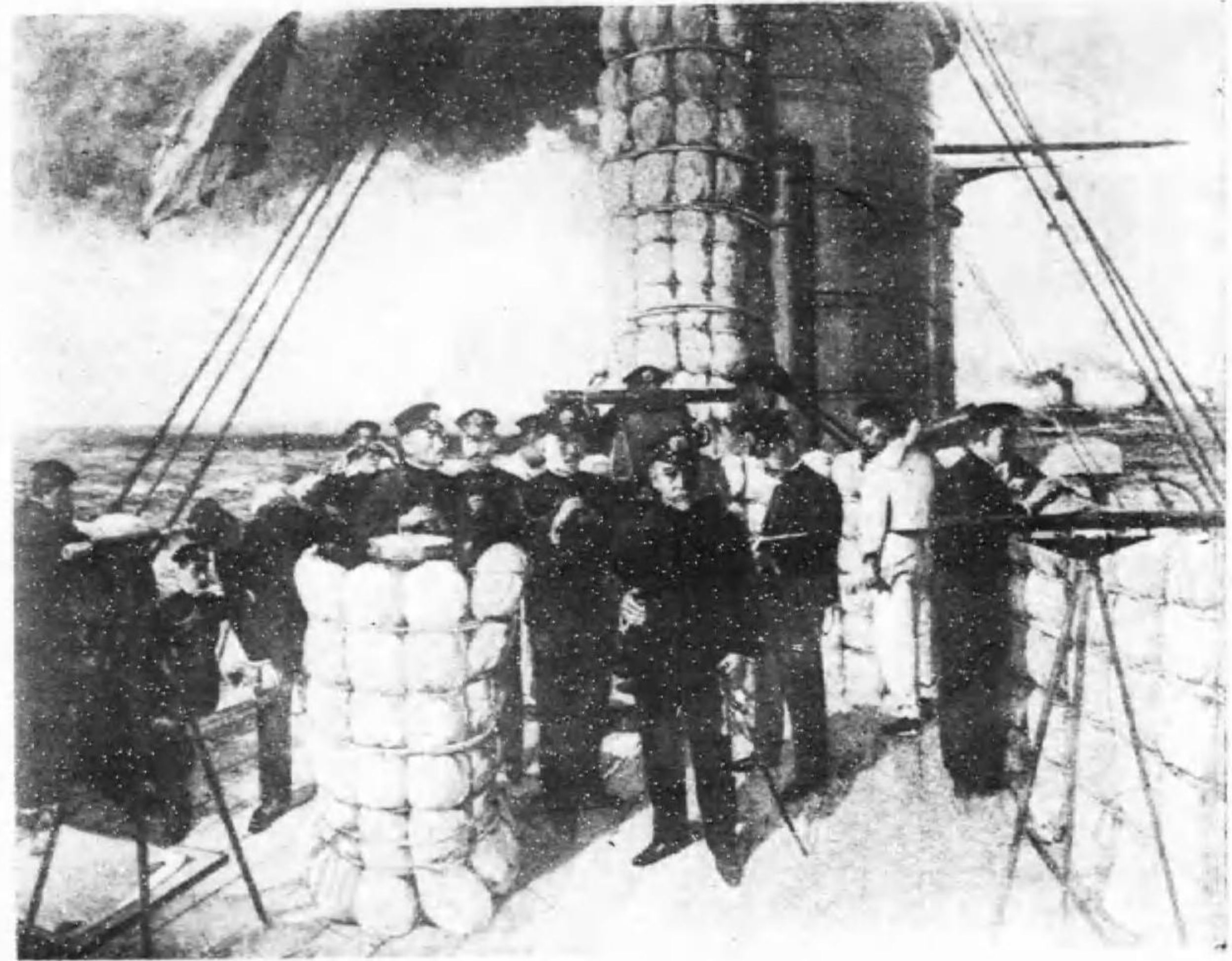
思ヒ起ス三十年前、明治三十八年三月十日奉天大會戰ハ遂ニ我軍ノ大勝ニ歸シ三十二萬ノ大敵軍ヲ粉壘シ奉天城頭高々ト日章旗ヲ掲グ越エテ十五日滿洲軍總司令官大山巖元帥ハ滿洲軍總參謀長兒玉大將以下幕僚ヲヒキイテ花々シク入城式ヲ行ツタ

寫眞說明

向ツテ左ヨリ四人目大山元帥、ソノ後尾野實信中佐(現大將) ヤ、右手黒外套兒玉總參謀長續イテ福島安正少將(後大將) 松川敏胤少將(後ノ大將) 一人オイテ井口省吾參謀(後大將) 其他田中義一、小池安行ノ各參謀

詔

勅



日本海々戰明治三十八年五月二十七日午後  
二時八分三笠艦上ノ光景

東郷聯合司令長官、加藤參謀長、秋山參謀  
飯田參謀、伊地知艦長、安保砲術長、長谷  
川少尉其他

宣戰ノ詔勅

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク各々其ノ職務ニ率ヒ其ノ權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力ス

シ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

惟テニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セズシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義ト爲シ且暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ

從ヒ列國トノ關係年ヲ逐フテ益々親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露國ト釁端ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國



トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然滿洲ニ占據シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併吞セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸センカ韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス事既ニ茲ニ至ル帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日今ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

明治三十七年二月十日

兼内閣總理大臣	伯爵	桂	太郎
内務大臣	男爵	山本	權兵衛
海軍大臣	男爵	清浦	奎吾
農商務大臣	男爵	曾彌	荒助
大藏大臣	男爵	小村	壽太郎
外務大臣	陸軍大臣	寺内	正毅
陸軍大臣	司法大臣	波多野	敬直
司法大臣	遞信大臣	大浦	兼武
遞信大臣	文部大臣	久保田	讓
文部大臣			

#### 平和克復ノ詔勅

四

朕東洋ノ治平ヲ維持シ帝國ノ安全ヲ保障スルヲ以テ國交ノ要義ト爲シ夙夜懈ラス以テ皇猷ヲ光顯スル所以ヲ念フ不幸客歲露國ト釁端ヲ啓クニ至ル亦寔ニ國家自衛ノ必要已ムヲ得サルニ出テタリ開戦以來朕カ陸海ノ將士ハ内籌畫防備ニ勤メ外進攻出戦ニ勞シ萬艱ヲ冒シテ殊功ヲ奏ス在廷ノ有司帝國議會ト亦善ク其職ヲ盡シテ以テ朕カ事ヲ獎メ軍國ノ經營内外ノ施設其緩急ヲ愆ラス億兆克ク儉ニ克ク勤メ以テ國費ノ負荷ニ任シ以テ費用ノ供給ヲ豐ニシ舉國一致大業ヲ贊襄シテ帝國ノ威武ト光榮トヲ四表ニ發揚シタリ是固ヨリ我皇祖皇宗ノ威靈ニ賴ルト雖抑亦文武臣僚ノ職務ニ忠ニ億兆民庶ノ奉公ニ勇ナルヲ致ス所ナラスムハアラス交戦二十閱月帝國ノ地歩既ニ固ク帝國ノ國利既ニ伸フ朕ノ恒ニ平和ノ治ニ汲々タル豈徒ニ武ヲ窮メ生民ヲシテ永ク鋒鏑ニ困マシムルヲ欲セムヤ嚮ニ亞米利加合衆國大統領ノ人道ヲ尊ヒ平和ヲ重ヌルニ出テ、日露兩國政府ニ勸告スルニ講和ノ事ヲ

スルヤ朕ハ深ク其好意ヲ諒トシ大統領ノ忠言ヲ容レ乃チ全權委員ヲ命シテ其事ニ當ラシム爾來彼我全權ノ間數次會商ヲ累ネ我ノ提議スル所ニシテ始ヨリ交戦ノ目的タルモノト東洋ノ治平ニ必要ナルモノトハ露國其要求ニ應シテ以テ和好ヲ欲スルノ誠ヲ明ニシタリ朕全權委員ノ協定スル所ノ條件ヲ覽ルニ皆善ク朕カ旨ニ副フ乃チ之ヲ嘉納批准セリ朕ハ茲ニ平和ト光榮トヲ併セ獲テ上ハ以テ祖宗ノ靈鑒ニ對ヘ丕績ヲ後昆ニ貽スヲ得ルヲ喜ヒ汝有衆ト其譽ヲ偕ニシ永ク列國ト治平ノ慶ニ賴ラムコトヲ思フ今ヤ露國亦既ニ舊盟ヲ尋テ帝國ノ友邦タリ則チ善鄰ノ誼ヲ復シテ更ニ益々敦厚ヲ加フルコトヲ期セサルヘカラス惟フニ世運ノ進歩ハ頃刻息マス國家内外ノ庶政ハ一日ノ懈ナカラシムコトヲ要ス偃武ノ下益々兵備ヲ修メ戰勝ノ餘愈々治教ヲ張リ然シテ後始テ能ク國家ノ光榮ヲ無疆ニ保チ國家ノ進運ヲ永遠ニ扶持スヘシ勝ニ狃レテ自ラ裁抑スルヲ知ラス驕怠ノ念從テ生スルカ如キハ深ク之ヲ戒メサルヘカラス汝有衆其レ善ク朕カ意ヲ對シ益其事ヲ勤メ益其業ヲ勵ミ以テ國家富強ノ基ヲ固クセムコトヲ期セヨ

五

御名 御璽

明治三十八年十月十六日

兼内閣總理大臣  
兼外務大臣  
海軍大臣  
農商務大臣  
兼內務大臣  
大藏大臣  
陸軍大臣  
司法大臣  
遞信大臣  
文部大臣

伯爵 桂 太 郎  
男爵 山 本 權 兵 衛  
男爵 清 浦 奎 吾  
男爵 曾 彌 荒 助  
寺 內 正 毅  
波 多 野 敬 直  
大 浦 兼 武  
久 保 田 讓

日露戰役概說

## 日露戦役概説

八

### 目次

- 第一章 開戦及聯合艦隊の極東海上制壓
- 第二章 韓國並遼東半島南部の占領
- 第三章 滿洲軍主力の北進
- 第四章 陸海軍協同作戦
- 第五章 遼陽附近の會戦
- 第六章 旅順要塞の陸海軍協同攻略
- 第七章 聯合艦隊の行動
- 第八章 沙河の會戦
- 第九章 沙河の對陣
- 第十章 奉天附近の大會戦
- 第十一章 日本海の大海戦
- 第十二章 終結

### 第一章 開戦及聯合艦隊の極東海上制壓

二月五日日露國交は遂に斷絶し、皇軍は大命を奉じて帝國の獨立自衛のために作戦行動を開始することになった。

翌六日わが聯合艦隊は征途に上り、二月七日韓國シングル水道に集合した後、司令長官海軍中將東郷平八郎は所定の戦策に従ひ、電光石火先づ旅順口及び仁川の敵艦の虚を衝いてこれを撃破し、將來の海上作戦を常に先制有利に導き併せて陸軍の仁川揚陸を掩護しようとして決心して、仁川へは途中から瓜生司令官の指揮下に第四戦隊及び第九第十四艇隊を分遣し、親ら聯合艦隊を提げて旅順口沖に向つた。

瓜生戦隊は八日、九日兩度に亘る仁川港外の合戦に、敵艦ワリヤーク、コレーツに大打撃を與へたので、敵艦は二隻とも港内深く遁入して遂に自爆するの止むなきに至つた。

聯合艦隊主力は八日夜圓島著、先づ驅逐隊を以て旅順口外に碇泊中の敵艦隊を襲撃して堅艦三隻に大損害を與へ、主力艦隊は九日口外に泊つて正午より敵艦隊及砲台を正攻し、敵の有力艦三隻に當分航行不能の打撃を與へて十日牙山泊地に歸り、仁川から來會した第四戦隊と合した。

旅順諸戦の捷報の傳はつたこの日宣戦の詔勅は換發された。綸旨炳として日月の如く、時も時とて

庶民の感奮更に一段の高潮に達した。

一息つく間もあらず十三日旅順再襲の命は第四、第五驅逐隊に下つたが、各艦は夜來の風雪怒濤に妨げられて引返した中に速鳥、朝霧のみは十四日未明港口に進入して敵艦ペトロパウロスクに魚雷襲撃を敢行、これに大損害を與へて殊功を奏した。

こゝに於いて聯合艦隊は前記數次のわが攻撃による敵の傷痕の未だ癒へざるうちに旅順港口を閉塞して、わが陸軍の滿洲進出を掩護しようとして二十四日この壯舉を決行した。天津丸以下五隻は決死の十七勇士を載せて港口に突入自爆し、稀少の損害を以てその目的の一部を達した。

これより先き二月十一日、浦鹽の敵艦隊四隻はその精銳と快速を恃んでわが北海擾亂を試み、青森近海にわが商船を砲撃撃沈した。この暴逆艦隊を撃碎してわが交通の安全を確保し、進んでその本據浦鹽斯德を撃破すべき重任に當つた第二艦隊司令長官上村彦之丞は、麾下を率ゐて三月六日浦鹽港前に達して威嚇砲撃を行ひ附近港灣を偵察の上、元山佐世保を経て十五日韓國北西岸の錨地に歸つた。

三月七日世界三大戦術家の一人、海軍中將マカロフがスタルク中將に代つて太平洋艦隊司令長官として旅順口に著任したので敗殘の敵も一脈の生氣を喚起した。

三月九日夜襲の任を帯びたわが甲乙驅逐隊は敵前行動中、十日朝敵驅逐隊と老鐵山及び黄金山下に

會ひ彼我ともに奮戦力闘、海戦史上稀有と稱せられる絃々相摩の大接戦の結果敵を敗走させたが、我亦損害尠からぬものがあつた。

この日午前十時、驅逐艦戦の後をうけて主戦艦隊、巡洋艦隊も黄金山に對して陣列を敷き、港内に間接射撃を加へ港口附近の各砲台を碎き、新市街を焼き盡し、大いに海軍砲の威力を發揮した。

三月二十一日曉天から前回同様の攻撃を行つたが、この日の戦闘の結果から見ると敵は閉塞船の位置を動かして港口の出入再び自由となつたらしいので、こゝに於いてか第二回閉塞の必要を見るに至り、二十七日千代田丸以下四隻の運送船を以て海陸嚴戒の敵港に閃雷彈雨を冒して壯烈勇敢な閉塞を強行した。閉塞の結果は未だ充分とはいへないが巡洋艦以上の大艦の出入は甚だ不自由になつた。

併し流石は名提督マカロフ、依然艦艇を港外に出動し百方士氣を鼓舞して我と雌雄を決しようとするらしい。この意圖を看破したわが艦隊は機先を制して四月十二日夜半、第四、第五驅逐隊掩護の下に、蚊龍丸は港外の雨に紛れて機雷を沈置した。而して翌十三日天明第二驅逐隊は敵の驅逐艦一隻を發見撃沈したが、この時わが艦隊は濛氣を利用して巧みに戦、巡洋艦隊を港外に出沒せしめ敵主力艦隊を前夜の機雷沈置面に誘致したが、勢に乗じて突進して來た敵の旗艦ペトロパウロフ、マ提督以下約六百名の將士は港外の泡沫と消えた。

次いで十五日、第一艦隊全部は港外正面に行動し、新來の日進、春日は鳩灣方面から間接射撃を行つてその初弾を敵に加へたが、この連次の攻撃で敵は當分殆んど戦闘力の大部を失ひ海陸ともに出で、戦ふの勇なきに至つた。

この間、浦鹽艦隊は春色漸く北海に訪れ、浦港の氷が解け初めると共に又しても蠢動を初めたので上村第二艦隊はこれが撃破のため四月十六日から五月一日にかけて韓國東岸に索敵行動し、又浦港前に進んで偵察や機雷沈置を行つたが、濛霧のため常ねに彼と航跡を異にしその間の苦心も空しく運送船金洲丸外商船二隻は敵艦の好餌となつた。

旅順再度の閉塞は概ね目的を達したとはいへ未だ出口はある、一艦たりとも脱出することがあつてはわが作戦の頓挫である、こゝに於いて聯合艦隊は五月三日新發田丸以下十一隻の運送船を以て第三回の閉塞を行つた。

敵の防禦嚴重で多大の犠牲を拂つたが港口は巡洋艦以上の大艦は通航不能となり、五日友軍をして旗鼓堂々遼東半島の一角に上陸することを得せしめた。

かくの如く八次の攻撃、三回の閉塞によつて殆んど旅順艦隊の死命を制したものと、これまでわが艦隊の航路や港灣に多數の水雷を敷設して防禦に充てゝいたので、これを除去するための掃海や更ら

に封鎖の完全を期するための強行偵察並にその掩護の必要上、爾後も間斷なく敵海面に行動したが、五月十二日から一週日の間にこれ等の行動作業のために艦艇七隻を失ひ二隻を損じた。

五月二十六日、戦局の必要上、東郷司令長官はその麾下艦隊を以て遼東半島南部を封鎖する旨の宣言を公にした。

かくてわが海軍の封鎖は益々嚴密となり、數次の強行偵察を行ひ連日の掃海に努めると共に、一方大孤山金洲の陸戦を掩護して六月に入つたが、この間彼我ともに相當の損害があつた。

この頃浦鹽艦隊は又々南下、牽制を試み六月十五日沖ノ島附近濛霧の裡に現はれて運送船和泉丸、常陸丸、佐土丸を無残にも撃沈、又撃破した餘勢を驅つて六月末には北海道及元山を、又七月二十日には大膽にも津輕海峽を東過南下して東京近海を脅かし、その間内外諸船舶に蠻行の限りを盡しわが海上交通線を攪亂して浦鹽に引き揚げた。

これより先き旅順艦隊は閉塞船を除き損傷艦の修理に努め六月二十三日朝、脱出を試みたので封鎖中の艦隊、驅逐隊は直に馳せ向つて半日一夜の大激戦にその數隻を撃破した。

その後著々掃海中七月五日大連灣に於いて掩護艦海門は觸雷沈沈した。

八月に入るや旅順艦隊はわが陸海兩方面からの壓迫にたへかね十日遂に大舉して脱出を企て、わ

が第一艦隊の總出動となり、正午に及んで黄海大海戦は開かれた。兩艦隊は秘術を盡して接戦數合、我は彼を包圍して母航に潰走せしめ退路を要してわが驅逐隊、水雷艇隊は勇敢に夜襲したので、敵艦隊は四分五裂の大損害を蒙り辛うじて舊港に歸つたのは軍艦七隻と驅逐艦、病院船各一隻で他は皆膠州灣、芝罘等の中立港や遠く樺太コルサコフ等に逃げ込んだ。この日の晝戦で敵の指揮官ウィットゲフト中將は戦死した。

黄海大捷後三月十四日味爽、第二艦隊對島海峽警備の網に遂ひ浦鹽艦隊の大魚は入つた。わが將士は雀躍してこれを蔚山沖に迎へ撃ち激戦五時間遂いにリューリクは沈み、他の二隻はまた起つ能はざる致命傷を負ひながらも辛うじて浦港に逃げ歸つた。

たゞ僅かに餘命端々たる敵艦を旅順及び浦鹽に残し、こゝに旭墩睡々聯合艦隊極東海上制壓の大業は殆んど完成されたのである。

## 第二章 韓國竝遼東半島南部の占領

二月五日平和破れ、八日第十二師團の臨時韓國派遣隊は、仁川に上陸して京城、仁川、龍山を守備し、聯合艦隊は仁川と旅順で敵艦隊を撃破したため韓國西岸での陸兵の上陸と海上輸送には危険の度

が薄らいだ。そこで第十二師團を仁川に、また第一軍を大同江の解氷を俟つて鎮南浦に上陸北進させ第十二師團は韓國臨時派遣隊を併せた後、更に進んで平壤を占領し、第一軍司令官の鎮南浦上陸と共に同軍司令官の指揮に入れた。

然るに韓國内に侵入してゐた敵兵は次第にわが軍のため壓迫されて鴨綠江右岸の要地に退き、同地附近に據てわが軍を迎へ撃うとしたから、第一軍は鴨綠江の渡河と攻撃の計畫を立て野戰重砲兵聯隊や多數の架橋縱列を呼び寄せ、北進を續けて四月二十一日新義州とその以南の地に開進を了つた。

かくて第一軍は愈々右岸の敵を攻撃するに決し、五月一日曉闇を冒して砲撃を開始、一氣に敵を粉碎して九連城附近一帯の敵陣地を占領し午後は蛤蜊塘附近の敵を撃攘して遠くこれを鳳凰城方向に潰走せしめた。この日第三艦隊の摩耶支隊は安東縣附近まで溯江して敵を砲撃し軍の攻撃を援助した。是より先、第一軍の平安道前進に方りその兵站線は主として海路に由つてゐたが、當時韓國内が動もすれば不穩に傾くので三月十一日韓國駐劄軍を編成して専ら國內の治安、綏撫に當り、兼ねて大同江以南での第一軍の兵站を掌らせた。

遼東の南部に根據を占めて第一軍と策應し南滿洲で作戰させやうとして編成された第二軍主力（第一、第三、第四師團主力）は五月五日その第一次輸送梯團は大沙河河口附近に上陸し、第一軍は第二軍

の上陸に先立ち鴨綠江右岸に進出して遂に敵の南進を引き付けやうとした。そこで第一軍は五月一日敵を攻撃して鴨綠江右岸を占領し次で鳳凰城附近に進軍したが、敵はわが軍の豫想とちがひ遼陽蓋平附近から南進せず、また旅順金州附近の敵も進んでわれを妨ごうとはしなかつたので、第二軍は極めて容易に目的地に上陸する事ができた。

然るに第一軍と第二軍とが空きすぎてゐて敵に中斷される虞れがあるので、尙一師團位の兵力を大孤山附近に上陸させ岫巖、析木城方面に行動し、機に應じ第一軍若くは第二軍に協同動作をさせやうとして獨立第十師團を編成した。同師團は五月十九日から右地に上陸を始めたが天候と上陸地が不良だつたのでその陸揚は意外にひま取つた。第二軍と獨立第十師團とは共に遼東半島の南岸にその足場を獲たので、大本營ではまづ北進軍と旅順攻圍軍の編成を準備するため第五、第十一師團を第二軍司令官の指揮下に入れた。是より先大本營は聯合艦隊の報告で大連灣の掃海作業も金州半島を中斷した後でなければその實行が極めて困難なことを知り、旅順を除いた金州半島の占領をまづ第二軍に當らせることとした。

當時敵兵は金州南方の南山附近に據て居たので、第二軍は五月二十六日未明大雷雨を物ともせずこれを攻撃して敵陣地を陥れ、次で二十九日大連を占領した。

金州半島の咽喉首もおさへ、且つ將來滿洲作戰軍のためその大根據地としやうとした大連もすでにわが手に入つたので、わが作戰のためには非常な好都合であつた。續いて第五、第十一師團の戦闘部隊も遂次上陸を始めて集結したので、第一、第十一師團で第三軍を編成してこれを旅順の敵に當らしむることとし、第二軍は方向を轉じて更に北進の準備をした。

六月上旬遼陽、蓋平附近の敵が漸次南進して來るとの報を得、急に第六師團を第二軍に増加し且つ南山敵陣地の攻撃に鑑み後備歩兵第一、第四旅團を第三軍に増加した。

また第一軍の右側には常ねに強大なる敵の騎兵が行動してゐるので、同軍の前進に伴ひ兵站線を確實に掩護するため近衛後備歩兵旅團を編成し、尙後備歩兵三大隊を第一軍に増加した。

また獨立第十師團は前進につれてその兵力が足りないので一時第一軍から淺田支隊を加へられたがその後更らに後備歩兵第十旅團を編成してこれに増加した。

第二軍は六月十三日普蘭店、大沙河の線を出發し十五日得利寺附近で大いに敵を破り、得利寺長嶺子の線に前進した。

當時太平洋艦隊増援のためバルチック艦隊が東洋に向つて來航する報せがあつたので、大本營ではその到着前に旅順港の敵艦隊を殲滅しやうとし、第三軍司令官に訓令して努めて速く敵要塞を陥れ敵



艦隊の根據地を覆へさうとした。

また六月上旬大本營は遼陽に向ふ前進の準備として滿洲地方の雨期前に第一、第二軍と獨立第十師團を遼陽平野に進めやうとしてそれ／＼計畫を定めなければならぬ。遺憾ながらその實現が出来なかつた。

六月二十日、第一軍司令官は目下の有様に鑑み軍の全力で賽馬集と分水嶺附近の敵を撃攘しやうとし、且つ淺田支隊の復歸を請ふたけれども、大本營では後備歩兵旅團が第十師團に増加しない前はでないが、分水嶺以北へ進出してはならぬことを答へた。第二軍は得利寺附近の戦闘後更に蓋平に向ふ豫定であつたが兵站輸送が續かないので實行出来ず困つて居る矢先、十九日大本營から前進の訓令に接したので萬難を排して二十二日先づ李官村河の線に向つて前進し、獨立第十師團は依然岫巖附近に留まり、且つその糧秣の集り方も豫定通りに進んだ。

六月二十日滿洲軍司令部の編成が令せられ、元帥侯爵大山巖を總司令官に、大將男爵兒玉源太郎を總參謀長に任じ二十三日編成完結、第一、第二、第三軍と獨立第十師團がその指揮に入つた。

### 第三章 滿洲軍主力の北進

六月二十四日、滿洲軍の各軍は總司令官からの旅順の敵艦隊が二十三日港外に脱出したので第二軍

の糧秣輸送が不確實となり、これがため豫期した遼陽の會戦はその實現が雨期後となるだらうから各軍師團の運動もそのつもりで計畫し、第二軍は陸上兵站によつて蓋平まで前進し、第三軍に努めて速く旅順を攻略せよとの訓令されたが當時第一軍はもはや運動を始め六月三十日までは草河長北分水嶺、藍花峯の線に進みてその後の前進を準備し、獨立第十師團は淺田支隊と共に分水嶺を攻撃後、第二軍蓋平攻略を援助するため七月九日混成の一旅團で湯地方面の敵を引付け、別に分水嶺方面から一支隊を派遣して析木城方面の敵を脅威し、その後同軍の前進につれて共に海城に向つてする作戦の準備をした。

第二軍は六月上旬以來、兵站輸送の困難と給養の粗悪に苦しんでゐたが七月となつて天候回復し、兵站輸送の景況も稍良くなつたので七月六日蓋平に向つて前進を起し、九日未明同地附近の敵を攻撃し敵を追ふて方家屯八家沈子青石關海山嶺の高地線を占領した。

この間滿洲軍總司令官は七月六日東京出發、八日廣島に到着し、九日第四軍司令官に訓令するにまづ遼陽を目當として前進し場合によつては第一軍若しくは第二軍に協力させることとした。次で總司令官は七月十日宇品出發、十三日聯合艦隊の根據地で東郷司令長官と會見し、翌十四日大連に上陸したが、十五日淺田支隊の復歸を認可した。同支隊は二十五日原師團に到着し、近衛後備歩兵旅團は二十

一日から二十七日の間に逐次本溪湖南方太子の左岸にその開進を終らふとして居た。

同日兒玉總參謀長は第二軍參謀長に對し同軍方面の敵情判斷を求めたところ、大石橋とその以南の敵兵は多く三師團を過ぎないと報告したから、十六日更らに參謀長に通報して速かに強大な前進部隊で大石橋營の線を占領し、一は旅順、營口間の連絡を根絶し、他では第五師團を析木城方面で第四軍と合一させ易く仕向けるやう希望した。

第一軍方面では七月十七日未明敵は摩天嶺とその南北のわが陣地に攻撃して來たが、第二師團は戦闘の後これを撃退し、また第十二師團の主力は十九日未明から橋頭附近の敵を攻撃し激戦の後同地を占領した。

然るに二十九日以来軍前面と太子河右岸方面では敵兵が頻りに増加する模様なので、軍司令官は機先を制してこれを撃破しやうと考へ、三十一日夜明けから攻撃を始め、八月一日まづ敵を大安嶺一帯の高地を攻略し以後だん／＼遼陽の敵陣地に逼らふとしてその前進を準備した。

第四軍は七月二十八日第二軍の第五師團をその戦闘序列に入れ、三十一日から八月一日に互つて析木城を攻撃し敵を海城方面に撃退して缸窰嶺附近から三角山附近を経て山城子附近に互る陣地を攻略したが、第二軍第三師團の右側支隊は本戦闘に参加協力した。次で軍は二日午後から第二軍に連なつ

て四日海城を攻撃する筈だったが、その後敵兵が全く退去したので石門峯、英城子の線に留まつて居た。

第二軍は七月に十四日未明から大石橋附近の敵を攻撃し第四軍もまたこれに策應したが、敵は二道峯子から青龍山を経て牛心山附近に互つて陣地を占領し防戦大いに勉めたため、第三師團は漸く日暮れ方戦闘を中止し、第五師團は更に夜戦で敵の第二陣地を攻略し、第三師團も二十五日未明敵を撃退して邊杆山を占領した。然るに軍前面の敵兵はすでに夜半から退却したので、これを追撃して平二房附近から丁家溝前老古林子を経て李家堡子に互る線に達した。

また八月一日、總司令官の訓令で海城攻撃を準備中、二日敵兵が北方に退却したので三日朝先進部隊で海城を、またその騎兵で牛莊城を占領し四日全軍擧つて艾塔堡子高堡子大堡子大堡屯の線に前進し、騎兵第一旅團をして遠く鞍山站方向を搜索させた。

第三軍は六月二十六日劍山を奪取して安子山、雙頂山の線に前進したが、七月二十三日第九師團を戦線に増加し二十六日以後全線攻撃運動に著手、二十八日長嶺子、鶯可石、土門子の線を占領し、三十日更らに鳳凰山の線に前進しやうとした同軍に附けられた攻城特種部隊は當時すでに大連附近に集合して前進準備中であつた。

總司令部は七月二十三日大連出發、普蘭店、得利寺を経て三十日熊岳城に到着したが、八月二日の牒報により敵は今後その第三、第四、第八軍團を動員する豫定だといふことを知つたが一方ではまた敵は遼陽の戦闘を避け遠く北方へ退却の準備中だとも傳へられた。然し總司令官は現在の敵の行動と遼陽附近のその施設行爲とに鑑み、きつと一大會戦を惹起するものと判断して著々その準備を進めて行つた。

#### 第四章 陸海軍協同作戰

海國の陸軍が海の彼方の敵の領土又は勢力下の地域に作戰する場合には、戦争の目的達成の爲めに特に海軍の活動を期待し陸軍との協力を必要とするが常である。日露戰役は實に此の適例であつて、その陸海軍で行つた協同作戰は殆んど全戰役に終始してゐて、且つわが戰勝の終局を飾つた本戰役で明かにその協同作戰の行はれたのは第二軍の海上輸送に始まつたが、事實はすでに開戰の始めから協同の實を擧げてゐたのであつた。即ち第一軍の上陸掩護とその前進援助とであつて、韓國臨時派遣隊の仁川上陸を始めとし第十二師團主力の上陸に引續き第一軍主力の鎮南浦上陸に、また陸軍碇泊場司令部の開設、揚陸機關の施設、棧橋の架設、特に海上連絡線の確保などについて海軍の協力一通りで

なかつたのである。

第一軍の作戰につれ大本營では旅順港口の閉塞と相俟つて第二軍を遼東半島に上陸させ、海陸呼應して要地を占領し堅固な根據地を作つて第一軍に策應させやうとし、大本營ではこれに就いての訓令を發した。

そこで伊東軍令部長は四月十五日其の訓令で艦隊の哨戒配備を更へたり、麾下の一部を鴨綠江に分遣して第一軍の渡江に助力させ、その他の艦艇を率ゐて第二軍の輸送掩護に任じたりした。

細谷司令官の命を承け第一軍の鴨綠江渡河に協力する摩耶支隊は四月二十五日鴨綠江口に達し、同軍の渡河援助に就て協議を遂げ、鴨綠江下流の敵情を搜索しその戰機の熟するのを待ち、二十九日以後安子山、娘々城、安東縣方面の敵堡壘を射撃し第一軍の攻撃に偉大の効果を與へた。

第二軍の海上輸送に就いてはこれまた聯合艦隊と軍とが協議してその上陸地を鹽大澳と豫定して、輸送計畫を規定し四月二十八日東郷司令長官は片岡第三艦隊司令長官に對しその輸送第一梯團の護送と上陸地點の防禦警戒を、また細谷司令官には上陸地點への先行と軍の直接上陸援助を命じ尙艦隊補缺員で聯合艦隊附屬陸戰隊（野元大佐指揮）を編成した。かくて第一輸送船團は五月五日午前鹽大澳に到着、陸戰隊は直に猴兒石附近に上陸して要地を占領、輸送部隊は風浪と困難とに闘ひつゝ上陸を

開始し、八日以後更に上陸地點を張家屯に改め五月十二日殆んど全部の上陸を了つたが、以後は海軍の護衛なしで五月十七日から六月十四日迄の間に第二、第三回輸送團の上陸を完了した。

獨立第十師團の大孤山附近上陸に方つても聯合艦隊では豫め上陸地點を偵察して、南尖子と決定し師團は聯合艦隊と協議を遂げその第一輸送梯團は細谷司令官の率ゐる第七戰隊の一部の護衛で五月十九日上陸し始め、同日中に殆んどその全部を、また三十日までに師團全部の揚陸を了つた。

第二軍方面蓋平、南山の作戰に對しては或は渤海灣より、或は金州灣から敵の陣地を砲撃し共に陸軍の攻撃動作に協力した。

第三軍方面の作戰に對しては、六月下旬海軍では黒井中佐の指揮する陸戰重砲隊を編成してこれを旅順攻圍軍に参加させ、まづ第一、第二砲台を劍山附近の陣地に据え七月二十六日以後陸軍重砲隊と協力して軍の前進攻撃を援助し、その後備砲と隊員、陣地に若干宛の防備を行なつたが開城の終局までよく陸軍と協同を完ふした。またこの間艦隊でも七月下旬以來攻圍前進につれ海上からの砲撃や、敵艦脱出の封鎖に従ひよく第三軍と策應して共同の任を盡した。

この他聯合艦隊は七月以降艦艇の一部を營口方面に差遣して、遼河下流にあつた敵艦を監視し同地附近の敵情を搜索して陸軍と共に營口附近の治安を維持した。

## 第五章 遼陽附近の會戰

八月上旬、わが第二、第四軍は海城附近に集結して滿洲軍の主力となり、第一軍は榆樹林子、様子峯一帯の高地を占領して第二、第四軍に協力する準備をして居た。これまでの戰鬪ではわが軍の兵力は敵よりも優勢なので勝を占めてゐたが、敵の兵力は次第に増大してこの頃では我よりも遙かに優勢となつたから、この後は寡を以て衆を破るの決心でこゝに遼陽攻撃の計畫を進め、各軍もその積りで準備に取りかゝつた。八月十四日各軍の前進準備ができたので總司令官は差し當り當面の敵を攻撃させやうとしたが、天候に阻まれて一旦延期した。

この間北方面では本溪湖附近の敵兵が頻りに太子河の渡河を企てゝゐる模様なので、總司令官はこの時機に機先を制するのが有利だと考へ、第三軍の成功を待つことなく總攻撃の日を二十八日と決定した。

當時露軍の兵力は著しく増加して凡そ歩兵が百九十一大隊、騎兵第六十二中隊、砲兵六十六中隊となり、わが軍の第一線に使用し得べき歩兵百八十八大隊、騎兵三十五中隊、砲兵八十一中隊と比べてその差頗る大なるものがあつたが、遼陽を速かに占領することは戰略上多大の關係を有するので、總司令官は偏にわが軍の忠勇に信頼してこの攻撃を斷行することに定めたのである。

第一軍は八月二十二日から運動を起し、二十五日夜から二十六日夜にかけ激戦の後紅砂嶺、寒坡峯毛石溝、浪子山を経て大西溝附近に互る線に進出し、敵を追撃して第二軍方面に策應した。

一方露軍は紅砂嶺附近の陣地の回復に努めたが、偶々二十六日の豪雨に陣地直後の湯河が増水して徒渉困難となりその退路も亦わが軍のために断たれようとするの惧れがあつたので遂に遼陽に退却した。

乃ち第一軍は敵の抵抗を受けることなく二十七日湯河右岸の敵陣地を占領し、二十八日猛烈に敵を追撃して遼陽の東南から同地を距る四、五里の線に達した。こゝで軍は再び本陣地に據る敵の主力に接觸し二十九日夜その右翼は太子河の渡河を、その左翼は岔路子、孟家房の線に向つて攻撃を準備した。

當時總司令官は深く望を同軍にかけ、敵が眞面目に遼陽で抵抗したら同軍の主力が太子河の右岸でその戦備を整へ終るのを待つて總攻撃の機軸ともしようし、もしまた敵が退却したら同軍の主力でこれを殲滅させやうと待ち望んで居た。

三十一日、軍の主力は太子河右岸を渡り近衛後備歩兵旅團は本溪湖を占領し、當時また太子河を渡らない第二師團の一部と近衛師團とは戦況が進まず、舊位置で持久戦をしてゐた。

九月一日、軍の主力は黒英台附近の敵を攻撃して戦鬪は漸く激しくなり、第二師團は夜に入つて敵陣地を攻略し、第十二師團は五頂山附近を占領した。

總司令官はこの日海城出發、湯崗子に到着した。

二日、軍主力の右翼では烟台炭坑附近一帯の高地を占領し、左翼は寶淨山の占領を企てたが戦鬪抄らず且つ暮頃炭坑と饅頭山方面に逆襲を受けたが奮戦の後これを撃退した。當時近衛師團はまだ太子河の左岸に、また近衛後備歩兵旅團は下石橋子附近の戦鬪が勝敗決せず夜となつた。

この日總司令官は湯崗子出發、沙河に到着した。

三日、軍の各方面共沈滞したが近衛後備歩兵旅團は上平台子附近の敵を撃退して、主力で烟台炭坑方面に轉進した。

四日午後、第二師團は寶淨山を、近衛後備歩兵旅團は日暮れ雙廟子附近に到つた。軍は夜半から進撃に移り、第十二師團は大達蓮溝附近で優勢の敵と衝突、苦戦の後五日朝これを西方に撃退し、第二師團は蘭泥堡附近に、近衛師團もまた軍命令で羅大台に到り、近衛後備歩兵旅團は舊位置に在つたが五日夜となり軍前面の敵は悉く退却してしまつた。

第四軍は第二軍と共に八月二十六日から運動を起し、同夜空心台西南高地から梨花峪を経て山咀子

西南高地の線を占領、二十九日更らに大山から櫻桃園に亘る線に前進し、第二軍の首山堡附近攻撃に連繫して早飯屯南方高地の攻撃を準備した。

三十日、第十師團は夜明けから早飯屯南方の高地を難攻し、また第五師團は第二軍の左翼に連なり主として北大山の敵を攻撃したが日暮となつてもその占領捗らず、總司令官は第二軍の徒歩砲兵第二獨立大隊と砲兵第一旅團の一聯隊を同軍に増加した。

三十一日、第十師團方面の戦況は依然發展せず、第五師團方面でもまた第三師團と共に北大山の攻撃を続け戦鬪頗る猛烈だつたが遂に敵陣地の奪取が出来なかつた。

九月一日、軍は前夜前面の敵兵が退却したのを知り直ちに追撃前進に移つたが、敵の大部はすでに太子河右岸料高山附近の高地に據つてゐた。

二日、軍は第二軍と共に遼陽直前の敵陣地を攻撃したが敵の頑強な抵抗に會ひ夜に入つても戦況が捗らなかつた。三日、第十師團は夕方から遼陽南方地區の攻撃を再興して同夜玉皇廟附近の敵堡壘を略取し、第五師團もまたこれに協同してその右翼の敵を攻撃したが敵兵はすでに退却してしまつた。

四日午後、軍は一支部で太子河を渡つて料高山を占領し、同日總司令官から戦後の整頓命令で軍は第二軍と共に高力檣黃家嶺子の線以南の太子河左岸に兵力を集結した。

第二軍は第四軍と共に八月二十六日運動を起し、二十七日午後全力を鞍山站騰鰲堡の線に向はんと準備して居た。

二十八日、朝來軍は立山屯から自旗堡の線に向つて進撃し、沙河城、昂堡劉二堡の線に達した。

二十九日、軍は前日の位置で終日首山堡附近の敵情と諸道路を偵察した。

三十日未明、軍は運動を起して首山堡の敵を攻撃したが、就中第六師團方面の敵兵は頑強に防戦したので秋山支隊の砲兵が敵の背面から射撃したけれども、戦況發展しないで夜となり、三十一日未明第三師團は北大山附近の敵陣地を夜襲してこれまた功を奏せず、第六師團方面でも第四師團の一部と協力して屢々敵を撃退して極力攻撃したが、首山堡西方高地の奪取ができず徒らに損害を被るばかりであつた。

然るに露將クロバトキンは有力な日本軍が太子河右岸に移れば、遼陽の設堡陣地に退いて防禦正面を縮め、これより節約した兵力を太子河右岸に集めて日本軍を同河に壓迫しようとする策を樹て、遂に三十一日没後からこの計畫の實行に移つた。

この結果今まで苦戦に苦戦を重ねてゐた第二軍はその前面の敵が俄かに退却したので、こゝに初めて蘇生の思ひをなし九月一日第四軍と共に前進して更らに遼陽直前の敵陣地を攻撃した。しかし敵の

抵抗頗る頑強で夜となつても戦闘が止まなかつた。

三日、軍は前日の攻撃を續けたが敵の防備は頗る堅固の上、敵もまた死力を盡して防戦したのでわが軍の死傷續出し、夜半再び攻撃を敢行したところ敵は遂に陣地を棄て、太子河右岸へ退却した。軍は殘敵を驅逐しつゝ四日朝ついに遼陽とその一帯の地を占領した。軍は六日以後騎兵第一旅團で太子河右岸の地區を搜索させ、次いで總司令官の命令により第四軍と共に高力橋黃家嶺子の線以南で太子河の左岸に集結し、尙騎兵第一旅團をして長河南方向に前進して敵情を搜索させた。斯やうに難攻だつた遼陽も幸ひわが軍の戦勝に歸し、わが作戦の主要な目的を達したといふものゝ一度當時第二軍方面の惡戦苦闘の跡を弔ふとき、坐ろに滿洲軍の危機此の上もなかつたことを回想し自から肌粟の生ずる感あるを覺える。

## 第六章 旅順要塞の陸海軍協同攻略

旅順攻圍軍は第一回攻撃の苦い經驗に鑑み、新たに正攻法を採用してこの金城湯地の攻略に當ることとなつた。抑々正攻法とは強襲に對する言葉であつて、大規模な施設の下に逐次攻撃陣地を推進して要塞に迫り、最後の攻撃陣地即ち突撃陣地より堡壘に突入する方法である。而かも攻撃陣地を推進

させるには對壕作業と稱して敵火の損害を避けるために壕を掘りながら進むのである。又それも叶はぬ場合は地下に隧道を掘り進める。即ち坑道作業によるのであるから、若し岩盤にでも出會へば一日尺寸も常ならずといふ有様であつた。

第三軍は九月上旬以來その困難な攻撃作業を進め中旬になつて漸く完成したので、九月十九日を期して所謂前進堡壘に對する攻撃を開始した。かくて二十日、第九師團は龍眠北方堡壘を奪取し、第一師團は水師營南方堡壘と南山、坡山（海鼠山）を占領したが、爾靈山に對する攻撃は二十二日に至り悲惨な結果を以て中止するの已むなきに至つた。

しかし攻城の主砲たる二十八糎榴彈砲は九月下旬その据付を了り、著々要塞本防禦線の正攻が進められつゝあつた。

かくて十月二十六日早朝全軍の攻城砲は一齊に大口を開き、第二回攻撃の幕は切つて落されたのである。この攻撃に於て第九師團は一戸堡壘、第十一師團は東鷄冠山第一堡壘（瘤山）を奪取したがその他は各方面とも敵壘堅く、壕また深く、遂に初期の目的を達することが出来なかつた。

當時敵艦隊は港内深く蟄伏してゐるとはいへ、婆羅的艦隊は次第に我に近づきつゝあるので旅順を陥入れるの必要は刻々痛切となつてきた。乃ち軍は十一月中旬第七師團を増加され、又各師團の正攻

作業も大いに進捗したので同月二十六日を期し、第三回の攻撃を執行するに至つた。即ち第一師團は松樹山、第九師團は二龍山、第十師團は東鷄山北堡壘の各永久堡壘及北隣の堡壘の如きは正面胸牆の一部を爆破して之れを奪つたといへ、前方や左方よりの猛烈な集中火を浴びて死傷續出、これまた目的を達しなかつた。この夜中村覺少將の率ゐる決死の白襖隊は北正面より要塞内部に突撃したが戰遂に利あらずして退却した。

軍司令官乃木大將は正面の力攻が到底不可能なのを見て意を艦隊の所決に資すべき爾靈山の攻略に轉じ、第一及び第七の兩師團を後備歩兵第一旅團を擧げて屢々突撃を反覆し、敵を全く撃退して十二月五日同山を占領した。この爾靈山の攻略に當りわが戦死實に七千餘に達したのであるが、一度山頂より瞰下すれば港内の艦船悉く暴露し、將に呼ばゞ答へんとする有様である。乃ち攻城諸砲兵は力を極めてこれを撃沈し日本海海戦に於ける赫々たる戦捷の一大原因を作つた。この間本防禦線上の永久堡壘に對するわが坑道作業は著々と進み、その中間地區及び右翼方面の攻撃作業も亦逐次敵陣地に切迫し、要塞の運命も日々に短縮して孤城落月、恰も風前の燈火となつて來たが時に寒氣いよいよ加はり地表は鐵の如く凍り而かも敵も亦防禦坑道を掘つて下方からわが坑道の爆破を圖るなど、地中暗闘の外に砲聲殷々として連日休まぬ有様であつた。

十二月十八日、第十一師團の山中地區隊は東鷄冠山北堡壘の攻撃に任じ電火一閃、轟然たる大爆音と共に堡壘を粉碎し硝煙濛々として天に冲する隙よりわが突撃隊は屍を踏んで猛進、遂に同堡壘を占領した。越えて二十八日第九師團の右翼隊は二龍山を、又三十一日第一師團の左翼隊は松樹山を爆破して各々占領した。

明くれば明治三十八年一月一日、瑞祥みなぎる元旦の午後敵の軍使は白旗を掲げて水師營南方に現はれて、開城をこふたのである。次で乃木將軍とステツセル將軍の歴史的會見となり、茲に目出度くその局を結んだのである。

## 第七章 聯合艦隊の行動

旅順背面の陸戦は次第に歩武を進めては行つたが、敵は所謂難攻不落の堅塞を死守してゐたので、わが第三軍は言語に絶する惡戦苦闘を重ね漸く十二月五日を以て二〇三高地を占領し、茲に初めて旅順の死命を制し、十二月十一日に至り旅順港内の敵艦は悉くわが砲火のために撃破され、獨りセワストボリは十二月九日残存せる驅逐艦隊六隻と共に港外に出で、山下に隠れ砲台掩護の下に砲火を避けた。



これより先き聯合艦隊は旅順背面の日本軍に壓迫せられるに従つて敵艦の脱出することあるを慮り愈々封鎖警戒に努めてゐたが、この頃に至り海面に浮流水雷が多くわが封鎖艦艇は殆んどこれを發見せざる日とはなき状態であつた。

九月三日、驅逐艦速鳥は暗夜封鎖勤務中にこれに觸れて沈没し、十八日平遠は双島灣方面に游弋中同く禍に罹り、十一月六日愛宕は渤海灣口警戒中直隸海峽に於て暗礁に乗り揚げて沈没し、十二月十二日高砂は怒濤風雪を冒かして封鎖警戒中浮流水雷のため渤海に沈んだ。而してセワストポリの鰻頭山下に避難錨泊するを見たるわが驅逐隊水雷艇は、十一日夜より十五日夜に至る間交々これを襲撃し遂に自ら爆沈するのやむなきに至らしめた。この攻撃に於てわが艦艇も多少の損害を蒙つた。

又浦鹽艦隊に對する作戦は蔚山海峽後尾崎灣を根據として對馬海峽の哨戒を繼續はしてゐたが、その間諸艦交々佐世保に回航し修理休養を行つて銳意勢力の充實に努めた。爾後浦鹽艦隊は屏息して日本海面波穩に三十七年末期を經過した。

却説十二月下旬、旅順に於ける露國艦隊はわが陸海兩軍の猛烈な挾撃によつて殆んど全滅するや、聯合艦隊は敵の増援艦隊に對する作戦準備を完成して置かうと、その大部は一旦これを内地に歸港させて速に戦闘力の恢復を圖り旅順及び朝鮮海峽方面には適當の兵力のみ留めることに決したので、東

郷聯合艦隊司令長官は二十四日、片岡第三艦隊司令長官の指揮下に軍艦七隻、假裝巡洋艦三隻、驅逐艦五隻、假裝砲艦九隻及水雷艇隊六個を留めて旅順方面の作戦を繼續させ、その他の艦艇を内地に回航せしめ親ら三笠に搭じて二十五日裏長山列島を發し二十八日吳軍港に歸着した。又上村第二艦隊司令長官は同月十六日朝鮮海峽哨戒の任務を瓜生第二艦隊司令官に委任し、出雲に搭じて佐世保に歸港し廿八日更らに幕僚の一部と共に陸路吳に到つて東郷聯合艦隊司令長官と相會した。

而して東郷、上村兩司令長官は陸路東上して三十日入京し、官民の熱誠な歓迎をうけ直に大本營に到つて戦況を闕下に伏奏した。

尋で三十八年一月二日、旅順港陥落するや港内に殘存してゐた敵砲艦は悉く自滅したけれども、驅逐艦數隻は夜陰に乘じ密に脱して膠州灣及芝罘に遁入した。仍て片岡第三艦隊司令長官は秋津洲及び第一驅逐隊を芝罘に派し又東郷（正路）第三艦隊司令官をして千代田、龍田及第五驅逐隊を率ゐて膠州灣に赴き遁竄した敵驅逐艦の武装を解除させ、爰に旅順方面の敵艦隊は全く殲滅した。

こゝに於いて旅順方面に留つてゐた艦艇は同月初旬から修理のため漸次内地に歸港し、聯合艦隊は愈々力を敵の東航艦隊に對する準備に用ひ、先づ艦隊の全力を鎮海灣方面に置き機に應じて作動することに決定し、内地に在る諸艦艇をして臨戦準備の傍諸訓練を勵行せしめ又吳にある三須第二艦隊司

令官をして吾妻、淺間を率ゐて津輕海峽に回航し、浦鹽艦隊に對し北海方面の警備に任せしめた。

次で十二日には戰時編制が改定せられた。

これより先き日本丸、香港丸の二假裝巡洋艦は三十七年十一月下旬、旅順方面行動中南洋方面の偵察を命ぜられ十二月二日佐世保に歸港して出動の準備を整へ、十三日佐世保を出發して南航の途に就いたが三十八年一月十八日その任務を了へ佐世保に歸著した。

二十一日、東郷聯合艦隊司令官は麾下一般に向ひ、特別任務に従事せるものゝ外修理完成次第第一、第二戰隊及龍田、千早各驅逐隊艇隊の一部（竹敷に集合すべきもの以外の艇隊）は鎮海灣に、第三、第四、第六戰隊及び第一、第九、第十四、第十五、第十九艇隊は竹敷に、第五、第七戰隊、八重山及び特務隊は佐世保に集合し、特に命ぜられた任務に服する傍鋭意内艦砲射撃及び水雷發射等の訓練に従事すべきことを命じ、上村第二艦隊司令官は當分鎮海灣附近に在つて朝鮮海峽に在る聯合艦隊の諸艦隊を統率し、浦鹽艦隊の南下に備ふるの外主として艦艇の教育訓練を監督し、出羽第一艦隊司令官は上村司令官の區處をうけ瓜生司令官に代つて第三、第四、第六戰隊及び竹敷に在る水雷艇を指揮して専ら朝鮮海峽の哨戒及び密航の拿捕に努めた。かくて西客遠來の勞に酬るるに日本海軍百練千鍛の砲彈と水雷の膳羞を以てせむとの準備は著々と工作せられていつた。

## 第八章 沙河の會戰

遼陽附近の會戰後、わが軍は遼陽北方四、五里の地に於て東西に互り第一、第四、第二軍の順に併び専ら戰鬪力の回復と北進の準備とに努めてゐた。

一方一敗地にまみれて北走した露軍は、一部を近くわが前面に残して奉天附近に退いた後、更に遠く北方に退却しようとしたが奉天を棄てるの不利を覺り、且つ莫大の増加兵團を得たのでこゝに乾坤一擲、わが戰備整はざるに乗じてこれを太子河左岸に撃攘し、更らに長驅して旅順を救援しようし企だてた。

大山滿洲軍總司令官は諸情報により、敵は九月下旬攻勢に轉ずるの企圖あるを知つた。

爾來前面の敵情は俄に活氣を帶び、殊にその主力は撫順及奉天附近で渾河を渡り續々南下して居るといふ諜報は頻々として總司令官の下に達する。

果せる哉十月八日、敵の一支隊は本溪湖附近に現はれて第一軍の右側を脅威し、翌九日更に二師團以上の兵を第一線に展開して我に逼つた。これと同時に第四師團前面にも約一個師團の敵が現はれ、今やその攻勢に轉ずるの機運は毫も疑ふの餘地なきに至つた。

こゝに於いて大山總司令官は敵がなほ渾河左岸に兵力を集結し終らざるに先だち、一舉にこれを撃

破しようと決意し、この夜断然全軍に攻撃前進を命じたのである。十日第一軍は未だ前進を起さずたゞその主力は時々敵の砲撃を受け、又その第十二師團に對する敵の攻撃は漸く猛烈になつた。

第四、第二軍はこの日早朝から攻撃前進を起し、第二軍は第三、第六、第四の三師團を第一線に併列して稍々東北に旋回しつゝ前進した。しかしこの日第五師團が五台子附近で戦つたのみで他は概ね事なく三、四里を前進して敵に接觸した。

十一日、第一軍右側方面の敵は約四師團に増加し、わが第十二師團の苦戦はその極に達した。

第四、第二軍はこの日初めて強大なる敵と到る處に激戦を交へ、第五師團は五軍台子東方高地を抜き、第三、第六師團は因得手縁と楊家灣附近を略し益々その左翼を張り出して敵を東北に壓迫した。しかし敵は當初の計畫を棄てず、たとひ奉天街道方面に於いて壓迫を受けるとも、飽くまで本溪湖方面の成功を期しつゝあつたので、わが第一軍正面は屢々危殆に瀕した。

一方第四軍方面では十一日夜第五師團を第二線に控置し、十二日三塊石山に夜襲を決行してこれを占領し、第二軍方面では前浪子街の快戦に敵の野砲十六門を捕獲した。

だが滿洲軍の攻撃には全體に於いて捗々しい進展がなく、十三日には各軍大に力戦したと雖も戦勢の均衡やゝもすれば破れようとする悲境に陥つた。こゝに於いて總司令官は前に控置した第五師團を

第一軍に増加しその方面より戦況の發展を策せんとしたが未だ意の如くならなかつた。

然るに同夜敵兵逐次退却の模様が見えたので、十四日夕總司令官は命令を下して各軍をして沙河の線に向ひ追撃せしめた。

十五日、第一、第四軍前面の敵は離脱したが、第二軍方面の敵は頑強に抵抗して退却の色も見えない。依つて總司令官は第四軍に山田支隊を復歸し、且つ同軍をして第二軍の沙河堡壘攻撃を援助させた。山田支隊は軍命令により同夕萬寶山附近の敵を攻撃し激戦の後これを占領した。

十六日各軍は沙河左岸の線に進出して陣地を占め、第三師團は山田支隊の援助を受けつゝ河北沙河堡の敵を攻撃したが抵抗頗る頑強だつたので第二軍司令官は諸隊に後退を命じた。

然るに退却に先だち薄暮と共に山田支隊及び第三師團の一部は優勢なる敵の逆襲を受け所謂萬寶山敗戦となつた。

十七日、わが軍は更らに大規模な敵の攻勢移轉を豫期したが遂に其の活動を見ずして戦線平穩に歸し、十八日以後形勢大なる變化なく兩軍沙河の小流を挟んで相對峙した。

斯くて沙河の會戦は敵の出鼻に殺到して幸にこれを撃退することが出来たが、敢て斷乎たる追撃を決行し得なかつたのは一に砲彈欠乏のためであり、以後敵と近く接觸して日夜銃砲火を交へ夜毎に夜

襲を交換しつゝ堅固に陣地を構成し、たゞたゞ彈藥の補充を待つの外なかつたのである。

四〇

## 第九章 沙河の對陣

沙河會戰後、日露兩軍は概ね沙河の線に相對峙し晝夜の別なく孜々として壕を深くし、壘を高くして只管陣地の鞏化に努めてゐた。この間軍隊の運動としては整理のための部隊入換へ、第一線守備隊の交代、工事部隊の出入、軍需品の運搬、練兵等に過ぎなかつたが、兩軍はまた互に脅威騷擾偵察に任じ、時々小夜襲を行つてはそれ等の仕事の妨害を努めてゐたのである。

かくて陣中にも曆日なく、滿洲の秋は多忙のうちに過ぎて酷寒の十一月を迎へた。各隊は土窟の堀鑿や井戸坐り又薪炭の製造等冬營の準備に忙殺されることになつたが、かゝる中にも萬一の敵襲に應ずる準備と、來春に於いて豫期される大會戰の準備とにをさをさ怠りなかつたことは勿論である。

冬營はただ我から進んで敵を攻撃せぬまでの事であつた。この間後備第一師團は韓國駐劄軍司令官に屬し韓國西北境の防備と第一軍側背の掩護とに任じてゐたが、同方面の敵兵力は殆んど我に大差なく又滿洲軍方面の如く接觸もしてゐなかつたので一般に靜穩であつた。

翌くれば三十八年一月一日、流石全城湯地を誇つた旅順要塞も遂いにわが有に歸し、第三軍主力は

東清鐵道方面より沙河陣地の左翼後に向つて北進し、その第十一師團は後備第一師團と共に鴨綠江軍を編成するため大孤山、鳳凰城を経て城域に前進した。この頃露軍ミシチュンコ騎兵團は海城、鞍站營口附近に襲來し、我に若干の損害を加へたが同騎兵團自身も亦多大の損害を受けて退却した。

當時我軍に於いても永沼及び長谷川兩挺身騎兵隊を出したが、後に至り奉天の會戰中遠く敵の背後に出で長春附近の鐵道及電信を破壊しその守備兵を襲つて少なからず敵を脅威した。

一月二十五日、敵の第二軍は大舉わが左翼に來襲した。そこには微弱な秋山騎兵支隊が廣い正面を守備してゐたに過ぎなかつたので黒溝台、蘇麻堡の要地は遂に敵の蹂躪するところとなつた。初めわが軍はこの敵襲を豫知しては居つたがかゝる大敵とは思はなかつたのである。そこで二十六日、第八師團（長 立見中將）と後備歩兵第八旅團とがこれに對し、折柄の風雪を冒かして蘇麻堡を回復し次で黒溝台に向つて逆襲したが、敵の兵力は意外にも多く忽ち苦戰に陥つた。

大山總司令官はこの方面の敵襲は容易ならざるを悟り、第四軍より第五師團及び後備歩兵第十旅團第一軍より第二師團を増援し、臨時立見軍を作つて二十七日以後攝氏零下二十六度の酷寒を冒してわれにも數倍するグリツペンベルグ十萬の大軍を逆襲し、二十九日全くこれを渾河右岸に擊退、茲に黒溝台の會戰を畢つたのである（立見軍は二月中旬頃迄漸次編成を解き再び對陣の姿勢に復した）。

四一

かくて露軍總攻撃の企圖は空しく挫折されたとはいへ、彼の策源は無盡蔵である。歐露來援の列車は日何十を以て數へられ、捲土重來の日遠きにあらざるを思はせた。これに對する我が準備も國を擧げて急ぎつゝある。奉天會戰への機はかくして熟しつゝあつた。

## 第十章 奉天附近の大會戰

清朝發祥の地として當時滿洲の中心をなしてゐた奉天は、また露軍最後の根據地でもあつた。されば露軍はその陣地の構成に全力を盡し、その兵備は汽車の續く限り晝夜を分かつすこゝに輸送され、最後の決戰の準備にをさゞ怠りなかつた。

これに對し滿洲軍總司令官大山元帥は、三十八年の解氷期に先だち鴨綠江軍と協力して前面の敵を攻撃するの計畫を樹て、先づ左右兩方面より敵の後方を扼し、而して後正面より突き出して一騎も漏らさず打つて取らうとしたのである。かくて二月二十日大山總司令官は各軍に對し愈々總攻撃の準備を命じた。

鴨綠江軍はこれに作應するため二月二十三、四日の兩日降雪を冒して激戰の後清河城附近の敵を破り、直ちに追撃して二十六日地塔——馬群鄂の線に進出した。然るに馬群鄂附近の敵陣地は意外に堅

固なるに加へその兵力も漸次増加して來たので、爾後三月七日に至る晝夜を分たぬわが攻撃も未だその功を奏するに至らなかつた。

この間、第一軍はその第二師團を以て高台嶺附近の敵陣地を攻撃してその大半を奪ひ七日鴨綠江軍に連繫したが、第一軍主力と自余の諸軍は二月二十六日まで未だ活潑な動作をせず、概ね沙河對陣中の位置にあつて待機して居つた。このわが右翼方面の猛烈な攻撃前進を見た敵將クロパトキンは、これを旅順より北進した乃木軍と考へその豫備隊の大部を同方面に移動したので、大山總司令官は此の機に乗じ乃木第三軍の繞回運動を実施することとした。即ち二月二十七、八日兩日、正面の第一、第二、第二軍の砲撃を以てこの企圖を秘匿し、第三軍は總縱列となつて進發、二十八日には敵の騎兵團を驅逐して稍々その左翼を張り出したので、こゝに各軍は殆んど齊頭面進出し、わが戦線は東方馬群鄂附近より四方大遼河まで山を踰え河を跨つて四十里の翼を張り、その兩翼に於いて少なくとも敵を包圍するに至つた。

かくて三月一日各軍は大山總司令官の命令一下、いよいよ各當面の敵に對して眞摯なる攻撃を開始した。即ち第三軍はその最左翼縱隊である第九師團を以て四方台附近の敵を撃攘し、二日主力を以て長驅奉天西方約五里に達し、三日には當面の敵を奉天西方三里に撃退した。而して第二軍は右の第三

軍の繞回運動により長灘附近の敵を撃破してこれを東北に追撃し、第四軍は左翼を軸として右旋回を行ひ第三軍の右翼に連繫した。

クロバトキン大將は二月二十八日に至つて始めて我第三軍の繞回運動を確知し、周章その豫備隊の大部を以てこれに當て、更らに右翼中央の各軍團より兵力を割いて増加したので奉天西方陣地の敵は日毎に強大を加へた。乃ち乃木第三軍は更らにこの正面の敵を避け、敵の右翼を繞回するため四日より逐次東北方に移動し、そのために生じた間隔は第二軍主力が渾河右岸に北移して補填した。而して第三師團を主力とする滿洲軍總豫備隊はこの日より逐次第二、第三軍に逐次増加せられた。

この間第一、第四軍は極力各當面の敵を攻撃したが、この方面の敵陣地は意外に堅固で容易に攻略することは出来なかつた。

しかし、これがため敵の正面を牽制し、第二、第三軍方面の攻撃を容易ならしめた効果は大であつた。而も斯くの如き情況は七日まで續いたが、流石の敵もわが猛攻に堪へ得ず遂に沙河の陣地を棄て、總退却に移り、一度は渾河の線に據らうとしたが決河の勢を以て急迫する我が第一、第四軍は敵の配備の餘裕を與へず、三月九日濛々たる大風塵を利用して舊站附近の敵陣地を突破した。

一方第三軍の繞回運動はこの時既に奉天北方に及んで居たので、敵は同夜半より全線遂ひに潰走し

わが軍は翌十日奉天を占領した。

かくてわが陸戦の終結を飾る奉天大會戦も、陛下の御稜威と幾多忠勇の尊き犠牲を以てわが軍の大捷に歸したので、各軍は奉天及びその北方地區に駐り戦後の整頓と補充を行ふ事になつた。

## 第十一章 日本海海戦

旅順方面に於ける戦局終了後、わが聯合艦隊は漸次内地に回航して過去一年間に於ける征戦に損傷した船體や兵器等の修理を行ひ戦備を新にし、根據地を朝鮮領海灣並に對馬竹敷に定めて敵増遣艦隊の來航に備へてゐた。已にして明治三十八年五月敵艦隊いよいよ安南沿岸を發して北進の途に就くに及んでからは、晝夜多數の哨艦艇を出して益々海峡の警戒を嚴にし、今や遲しと決戦の日を待つてゐたのである。

かくて五月二十七日は來た。

この日、夜來の濛氣未だ去りやらぬ黎明に南方哨區を戒めてゐた哨艦信濃丸は、二列縦陣の形も嚴に堂々三十八隻より成る敵艦隊が今や對馬海峡さして進航しつゝあるのを發見し、直に警報を全軍に傳へた。

この時聯合艦隊主力を率ゐて鎮海灣に在つた東郷司令長官は、この警報に接するや直に隊を結束して急速出動し、敵の前路を扼せんがため艦隊の針路を沖の島に向つて定め、第三艦隊を率いて竹敷に據つた片岡司令長官も亦即刻隊を率ゐて出港し、先づ對馬南方に至つて敵の出現を待ち、敵と接觸を保ちつゝそれを主力艦隊の所在地に誘導した。

時に空は次第に晴れ渡つたが數日來の強風は尙熄まず、海波は大に荒び濛氣は深く海面を蔽ふて展望極めて狭く、わが主力艦隊は漸く午後一時三十分に至り沖島附近に於いて初めて敵艦隊と近く相見ゆるを得た。

敵はロゼエストウエンスキー司令長官の旗艦スウオーロフを先頭に、アレキサンダー三世、ボロジノ、アリヨール、オスラービヤ、シソイウエリーキー、ナワリン、ナヒーモフ、ニコライ一世、セニヤウキン、アブランクシン、ウシヤークフの十二隻より成る主戦艦隊を單縦陣に備へ、巡洋艦オレグ、アウローラ、ドンスコイ、モノマーフ、ジェムチウグ、イズムルード、アルマーズをして假裝巡洋艦ウラール、工作船カムチャツカ及び特務船五隻を掩護して主戦艦隊の右後方に續航せしめ、驅逐艦八隻をこれ等兩隊の間に配し、病院船アリヨール、カストローマ二隻を列後數哩に従へ約十哩の速力を以て威風堂々荒波を破り、浦鹽斯德に向ひ航進してゐたのである。

これに對し我聯合艦隊司令長官東郷大將は、三笠を旗艦として敷島、富士、朝日、春日、日新の六隻より成る第一艦隊を直率し、上村第二艦隊司令長官の率ゐる第二戦隊 出雲、吾妻、八雲、淺間、磐手と共に艦隊主力となつて専ら敵主戦艦隊に當り、出羽中將の率ゐる第三戦隊（笠置、千歳、音羽新高）、瓜生中將の率ゐる第四戦隊（浪速、高千穂、明石、對馬）、東郷正路少將の率ゐる第六戦隊（須磨、千代田、秋津洲、和泉）並に五隊の驅逐隊（二十一隻）と十一艇隊（四十三隻）とを主力と連繫して適宜敵に當らしめんとした。

かくて彼我艦隊の距離は次第に接近し、戦機は刻々に迫つて來た。

「皇國ノ興廢此ノ一戦ニアリ各員一層奮勵努力セヨ」の信號が三笠艦上檣頭高く掲げられたのは、午後一時五十分であつた。次で二時八分戦闘の第一弾は先づ敵の旗艦スウオーロクから放たれ、同十分三笠これに應じ茲に日露兩艦隊の大決戦の幕は切つて落されたのである。

わが主力諸艦は相踵いで三笠に倣つて敵の先頭に猛火を集中したので、オスラービヤが先づ沈没し次いでスウオーロクが落伍した。其他の敵艦も亦多大の損害を被つて漸次南東方に撃壓せられ、わが諸艦は益々奮進してこれを掩撃し、日没までに戦艦スウオーロフ、ボロヂノ及アレキサンダー三世を撃沈した。

晝間の砲戦が終りを告げると、主力に代つてわが驅逐艦、水雷艇は時こそ來れと戰場に驀進し、敵の殘艦を包圍して猛烈果敢な襲撃を決行したので、戰艦ナワリンは撃沈せられ、戰艦シソウエリーキー、裝甲巡洋艦アドミラルナヒーモフ及ウラヂーミル・モノマーフは傷いて對馬の東北岸近く沈没した。幸に同夜の危難を免がれた戰艦ニコライ一世、アリヨール、海防艦アグラクシン及セニヤークンハネボガトフ少將に率ゐられて北航中、翌朝リヤンニールド附近に於いてわが艦隊に發見せられて投降し、巡洋艦スウェトラーナは竹邊灣沖で撃沈せられ、裝甲巡洋艦ドミトリー・ドンスコイは豐陵島の沿岸で自沈し、海防艦ウシヤークコフも亦同島附近で撃沈せられた。

而して纔かに虎口を脱れて北走したイズムルードはセントウラジミル灣に擱座破壊し、その他驅逐艦四隻は撃沈せられ、一隻は自沈し、一隻は上海に遁れ、一隻はロジエストウエンスキ提督及其の幕僚を乗せたまま、漣に捕へられて投降し、巡洋艦アウローラ、オレーグ、ジエムチウグは馬尼刺に遁れて武装を解き、假裝巡洋艦及特務艦船も、或は沈み或は上海に遁竄し、浦鹽斯德に到着し得たものは唯巡洋艦アルマーズと驅逐艦二隻のみで、斯くの如く曠古空前の大勝を博した聯合艦隊は、捕獲軍艦及び六千有余の俘虜を護送して戰場を去り、佐世保、舞鶴、竹敷、鎮海灣等に分れて歸泊した。

## 第十二章 終 結

奉天會戰後、滿洲軍は軍を整備して右翼海龍城附近より左翼八面城附近に至る戰線五十里に互り對峙し、彼我の偵察隊や斥候は絶えず警戒線の前方に於いて衝突を繰返し、互に警戒線を脅かしつゝ遂に十月十六日の平和克復に及んだ。

尙大本營は皇軍戰況の發展と共に三十八年三月三十一日、樺太占領軍として原口中將の下に新に獨立第十三師團を編成して、七月上旬片岡中將の率ゐる北遣艦隊護衛の下に威風堂々大湊を出發、七日より大泊東方約二里半の女麗に上陸、八月一日全島の攻略を畢つた。

東郷聯合艦隊司令長官は、對馬方面に於ける特務艦隊を上村司令長官の麾下に入れ、親ら第一艦隊の主力を率ゐて七月二十竹敷を發し、浦ノ郷、美保の關、舞鶴、宮津灣及び福岡灣を巡航して、内陸砲對抗射撃や、陸戰隊の演習を行つた。かくて聯合艦隊は諸種の訓練をなしつゝ平和克復に至つたのである。

をばり



奉天大會戰と日本海海戦の  
彼我勢力比較表及其の戦績

目次

- 一、奉天大會戰日露兩軍參加員ト其ノ損害
- 一、日本海々戰ニ於ケル我勢力
- 一、日本海々戰露西亞ノ勢力
- 一、日本海々戰ニ於ケル彼我損害比較表

奉天大會戰日露兩軍參加人員ト其ノ損害

區別	參加人員	戰傷者	浮廣
日本	二四、九八〇	七〇、〇二八	十
露西亞	三二、〇〇〇	九〇、〇〇〇	三二、七九二

日本海々戦ニ於ケル我勢力

- 第一戰隊 戰艦三笠(長官旗艦) 同 敷島、同 富士、同 朝日  
巡洋艦春日、同 日新、通報龍田(以上東郷司令長官直率)
- 第二戰隊 巡洋艦出雲(長官旗艦) 同 吾妻、同 常磐、同 八雲、同 淺間、同 磐手  
通報艦千早(以上上村第二艦隊司令長官直率)
- 第三戰隊 巡洋艦笠置(司令官旗艦) 同 千歲、同 音羽、同 新高(以上出羽司令官指揮ス)
- 第四戰隊 巡洋艦浪速(司令官旗艦) 同 高千穂、同 明石、同 對島(以上瓜生司令官指揮)
- 第五戰隊 巡洋官殿島(長官旗艦) 戰艦鎮遠、巡洋艦松島、同 橋立(武富司令官旗艦)
- 通報艦八重山(以上片岡第三艦隊司令長官直率)
- 第六戰隊 巡洋艦須磨(司令官旗艦) 同 千代田、同 秋津洲、同 和泉(以上東郷正路司令官指揮ス)
- 第七戰隊 戰艦扶桑(司令官旗艦) 巡洋艦高雄、砲艦筑紫、同 鳥海、同 摩耶、同 宇治  
(以上山田司令官指揮ス)
- 第一驅逐隊 春雨(司令乘艦) 吹雪、有明、霞、曉(以上藤本司令指揮ス)
- 第二驅逐隊 隴(司令乘艦) 電、雷、曙(以上矢島司令指揮ス)
- 第三驅逐隊 東雲(司令乘艦) 薄雲、霞、漣(以上吉島司令指揮ス)
- 第四驅逐隊 朝霧(司令乘艦) 村雨、朝潮、白雲(以上鈴木司令指揮ス)
- 第五驅逐隊 不知火(司令乘艦) 叢雲、夕霧、陽炎(以上廣瀨司令指揮ス)

- 第一艇隊 第六十九號(司令乘艇) 第七十九號、第六十七號、第六十八號(以上福田司令指揮ス)
- 第九艇隊 蒼鷹(司令乘艇) 雁、燕、鵠(以上河瀬司令指揮ス)
- 第十艇隊 第四十三號(司令乘艇) 第四十號、第四十一號、第三十九號(以上大瀧司令指揮ス)
- 第十一艇隊 第七十三號(司令乘艇) 第七十二號、第七十四號、第七十五號(以上富士本司令指揮ス)
- 第十四艇隊 千鳥(司令乘艇) 隼、眞鶴、鵠(以上關司令指揮ス)
- 第十五艇隊 雲雀(司令乘艇) 鷺、鶴、鶉(以上近藤司令指揮ス)
- 第十九艇隊 鷗(司令乘艇) 鴻、雉(以上松岡司令指揮ス)
- 第二十艇隊 第六十五號(司令乘艇) 第六十二號、第六十四號、第六十三號(以上久保司令指揮ス)
- 附屬特務艦隊 亞米利加丸、佐渡丸、信濃丸、滿洲丸、八幡丸、臺南丸、熊野丸、日光丸、臺中丸(司令官旗艦)、春日丸、大仁丸、平壤丸、京城丸、愛媛丸、蚊龍丸、高阪丸、武庫川丸、第五宇和島丸、海城丸、扶桑丸、關東丸、三池丸、神戸丸(小倉司令官指揮ス)
- 右ノ外ニ竹敷要港部及吳鎮守府ニ屬スル次ノ四艇隊參加ス
- 第十六艇隊 白鷹(司令乘艇) 第六十六號(以上若林司令指揮ス)
- 第十七艇隊 第三十四號(司令乘艇) 第三十一號、第三十二號、第三十三號(以上青山司令指揮ス)
- 第十八艇隊 第三十六號(司令乘艇) 第六十號、第六十一號、第六十五號(以上河田司令指揮ス)

日本海々戦露西亞ノ勢力

第一戰艦隊 戰艦クニヤージ・スウォーロフ（ロ提督旗艦） 同 アレキサンドル三世、 同 ボロジノ  
 同 アリヨール  
 第二戰艦隊 戰艦オスラーピヤ（フェリケルザム少將旗艦） 同 シソイ・ウエリーキー、 同 ナワリン  
 裝甲巡洋艦アドミラル・ナヒーモフ  
 第三戰艦隊 戰艦イムベラートル・ニコライ一世（ネボガトフ少將旗艦） 裝甲海防艦ゲネラル・アドミラル・  
 アブラクシン、 同 アドミラル・セニヤウキン、 同 アドミラル・ウシヤニコフ  
 巡洋戰艦隊 防護巡洋艦オレーグ（エンクウキスト少將旗艦） 同 アウローラ、 裝甲巡洋艦ドミトリイ・ド  
 ススコイ、 同 ウラヂーミル・モノマーフ、 假裝巡洋艦リオン、 同 ヅネーブル  
 偵察戰隊 防護巡洋艦スウェトラナ（シエイン大佐代將旗） 假裝巡洋艦クバーニ、 同 テレーク、  
 同 ウラール  
 第一驅逐隊 巡洋艦ジエムチウグ、 同 イズムルード、 驅逐艦ベドワイ、 同 ブイスツルイ、 同 ブイ  
 ヌイ、 同 ブラウイ  
 第二驅逐隊 驅逐艦グロムキー、 同 グロズヌイ、 同 ブレスチャリシチー、 同 ベゾウブリヨーチ  
 ヌイ、 同 ボードルイ  
 運送船隊 巡洋艦アルマーズ（ラドロフ大佐代將旗） 及運送船十四隻、 病院船アリヨール、 カストローマ

日本海々戦ニ於ケル彼我損害比較表

艦別	撃沈	排水量	戦傷者		
			戦死	負傷	計
水雷艇	三隻	二五五噸	一一七名	五八三名	七〇〇名
合計	三隻	二五五噸	一一七名	五八三名	七〇〇名

露西亞		日本	
艦別	撃沈	撃沈	捕獲
戰艦	六隻	二隻	八隻
巡洋艦	五隻	二隻	五隻
海防艦	一隻	二隻	三隻
特務艦	三隻	三隻	三隻
驅逐艦	四隻	一隻	五隻
總計	十九隻	五隻	二十四隻
俘虜		戦傷者	
提督以下將校 一八〇名		戦死	
同相當官 二六八名		負傷	
文官 五名		計	
准士官 一二三名		戦死	
下士以下 五、七、一〇名		負傷	
文官 二一名		計	
下士以下 四、三、四、四名		戦死	
四、五、四、五名		負傷	

日露戰役戰歿者統計表

陸軍		海軍		將校以下	
戰死	戰傷死	戰死	病死	戰死	病死
將校	一、五二八	三九八	三一三	二、二三九	
準士官	三三三	八五	六六	四八三	
下士官	七、八九五	一、四三五	一、四〇二	一〇、七三二	
兵	三八、八六二	九、四九六	二〇、四四〇	六八、七九八	
軍屬	三九六	一三	一、七七四	二、一八三	
計	四九、〇一三	一一、四二七	二三、九九五	八四、四三五	
合計				二、五四六	五九

日露兩軍々艦損失比較表

日露軍艦損失比較

(沈は沈没、解は武装解除、捕は捕獲にして一二三は太平洋第一、第二、第三艦隊の別なり)

▲ 戦艦

日本		露國	
艦名	噸數	艦名	噸數
敷島	一五、〇八八	(沈)レトウキサン(一)	一一、九三一
朝日	一五、四四三	(沈)ベレスウキツチ(一)	一二、六七四
(沈)初瀬	一五、二四〇	(沈)ポベード(一)	一二、六七四
三笠	一五、三六二	(解)ツエサレウキツチ(一)	一二、九一二
富士	一二、六四九	(沈)ベトロパウロウスク(一)	一〇、九六〇
(沈)八島	一二、五一七	(沈)ポルターワ(一)	一〇、九六〇
		(沈)セバストポリ(一)	一〇、九六〇
		(沈)クニヤージスワロフ(一)	一三、五一六
		(沈)アレキサシドル三世(一)	一三、五一六
		(沈)ボロジノ(一)	一三、五一六
		(捕)アリヨール(一)	一三、五一六
		(沈)オスラビア(一)	一二、六七四

扶 鎮 日 春 磐 出 八 吾 常 淺  
桑 海 進 日 手 雲 雲 妻 磐 間

七、三三五  
三、七七七

九、八五五  
九、八五五  
九、四五六  
九、八〇〇  
九、九〇六  
九、九〇六  
七、七〇〇  
七、七〇〇

▲ 巡洋艦 ▲ 裝甲海防艦 ▲ 裝甲巡洋艦

(沈) シツイウエリキー(一) 一〇、四〇〇 一八九四  
(沈) ナワリリン(一) 一〇、二〇六 一八九一  
(捕) ニコライ一世(三) 九、五九四 一八八八

グロモボーイ(一) 一二、三五九 一八九九  
ロシヤ(一) 一二、一九五 一八九六  
(沈) リユリツク(一) 一〇、九三六 一八九四  
(沈) パーヤン(一) 七、七二六 一九〇〇  
(沈) アドミラルナヒモフ(一) 八、五二四 一八八五  
(沈) ドミドリドンスコイ(一) 六、二〇〇 一八八三  
(沈) ワラジミルモノマフ(三) 五、五九三 一八八二

(捕) ゲネラルアドミラルアブラキシン(三) 四、一二六 一八九六  
(捕) アドミラルセニヤウキン(三) 四、九六〇 一八九四  
(沈) アドミラルウシヤコフ(三) 四、一二六 一八九三

笠 千 笠  
置 歲 砂  
(沈) 高砂  
(沈) 吉野  
浪 速  
高 千 穂  
對 馬  
新 高  
音 羽  
須 磨  
明 石  
秋 津 洲  
巖 島  
松 島  
橋 立  
和 泉  
千 代 田  
(沈) 濟遠

四、九七八  
四、八三六  
四、二二五  
四、二二五  
三、七〇九  
三、七〇九  
三、四二〇  
三、四二〇  
三、〇四八  
二、八〇〇  
二、八〇〇  
三、一七二  
四、二七八  
四、二七八  
四、二七八  
二、九六七  
二、四三五  
二、四八〇

三一  
三一  
三〇  
二五  
一八  
一八  
三六  
三六  
三六  
二八  
二八  
二五  
二二  
二二  
二四  
一六  
一六

(沈) ワリヤグ(一) 六、五〇〇 一八九九  
(沈) バルラダ(一) 六、七三一 一八九九  
(解) デイヤナ(一) 六、七三一 一八九九  
(解) アスコリツド(一) 五、九〇五 一九〇〇  
ボカチール(一) 六、六七五 一九〇〇  
(沈) ノーウイック(一) 三、〇八〇 一九〇〇  
(沈) バヤーリン(一) 三、二〇〇 一九〇〇  
(解) オウローラ(一) 六、七三一 一九〇〇  
(解) オレグ(一) 六、六四五 一九〇三  
(沈) スウエートラナ(一) 三、七二七 一八九六  
(解) ゼムチユグ(一) 三、一〇三 一九〇三  
(沈) イズムルオード(一) 三、一〇三 一九〇三  
アルマーヅ(一) 三、二八五 一九〇三



八重山 一、六〇五  
 (沈)宮古 一、八〇〇

▲ 其他軍艦

千早 一、二五〇  
 龍田 八六〇  
 (沈)平遠 二、一八五  
 筑紫 一、三八五  
 愛宕 六二二  
 摩耶 六二二  
 鳥海 六二二  
 赤城 六二二  
 (沈)大島 六四〇  
 (沈)海門 一、三六七  
 高雄 一、七七八  
 金剛 二、二八四  
 比叡 二、二八四  
 天龍 一、五四七

其他軍艦  
 (沈)グレミヤシチー(一) 一、四九二  
 (沈)オツワーシヌイ(一) 一、八九二  
 (沈)ラスボイニク(一) 一、三三四  
 (沈)チヂキツト(一) 一、三三四  
 (沈)ザビヤカ(一) 一、二二四  
 (沈)コレイツ(一) 一、二一三  
 (解)マンジウール(一) 一、二二四  
 (沈)ギリヤーク(一) 九六二  
 (沈)シヴーヲ(一) 九五〇  
 (沈)ポーブル(一) 九五〇  
 (沈)フサードニク(一) 四〇〇  
 (沈)ガイダマーク(一) 四〇〇  
 (捕)アンガラ(一) 一、一七〇  
 (解)レナ(一) 一〇、二二〇

武藏 一、五〇二  
 大和 一、五〇二  
 葛城 一、五〇二  
 豊橋 四、一二〇

一九  
 一八  
 二一

(沈)アムール(一) 二、五九〇  
 (沈)エニセイ(一) 二、五九〇  
 (沈)ウラール(一) 八、二七〇  
 テレーク(一) 七、二四〇  
 クーハニ(一) 八、四七〇  
 リオン(一) 七、二七〇  
 ドニエーブル(一) 五、四三二

白雲 三七三  
 朝潮 三七三  
 霞 三六四  
 (沈)曉 三六四  
 春雨 三八一  
 (沈)速鳥 三八一  
 雷 三一  
 電 三一  
 曙 三一

二四  
 三五  
 三五  
 三四  
 一  
 三六  
 三一  
 三一  
 三一

▲ 驅逐艦

(沈)ボエウオイ(一) 三五〇  
 (沈)ブヂーテリヌイ(一) 三五〇  
 (解)ベスボシチアドヌイ(一) 三五〇  
 (解)ベズストラシヌイ(一) 三五〇  
 (解)ブズシウムヌイ(一) 三五〇  
 (沈)レーテナトブラーコフ(一) 二五〇  
 (捕)レシーテリヌイ(一) 二四〇  
 (解)セルヂーツイ(一) 二四〇  
 (解)スモールヌイ(一) 二四〇

一八九九  
 一八九九  
 一八九九  
 一八九九  
 一八九九  
 一八九九  
 一八九三  
 一八九三  
 一八九三  
 一八九三

戰艦 裝甲巡洋艦 裝甲海防艦 巡洋艦 其他軍艦 驅逐艦 計

戰艦	裝甲巡洋艦	裝甲海防艦	巡洋艦	其他軍艦	驅逐艦	計
六	八	二	二〇	一八	二一	七六
八六、二九九	七四、一七八	一一、一一二	六八、四八一	二六、六八九	七、四二五	二七四、〇八四
二	一	一	四	四	二	一二
二七、七五七	一二、七三三	四、七九七	四、七三三	四、七三三	七三八	四六、〇二五
四	八	二	一六	一四	一〇	六四
五八、五四二	七四、一七八	一一、一一二	五五、七四八	二一、八九二	六、六八七	二三八、一五九
現存						六九

▲ 日本艦隊損害統計

戦争に參與せしもの	沈没せしもの	現存
隻數	隻數	隻數
噸數	噸數	噸數
噸數	噸數	噸數

- (沈) プレスチャーシューター(二) 三五〇
- (沈) ブイストルイ(二) 三五〇
- (解) ボールドルイ(二) 三五〇
- (捕) ビエードウキイ(二) 三五〇
- (沈?) ベスヴフレチエヌイ(二) 三五〇
- (沈?) グロズヌイ(二) 三七〇
- (沈) グロームキ(二) 三五〇
- (沈) プレスチャーシューター(二) 一九〇〇—二
- (沈) ブイストルイ(二) 一九〇〇—二
- (解) ボールドルイ(二) 一九〇〇—二
- (捕) ビエードウキイ(二) 一九〇〇—二
- (沈?) ベスヴフレチエヌイ(二) 一九〇〇—二
- (沈?) グロズヌイ(二) 一九〇四
- (沈) グロームキ(二) 一九〇四

連雲 東雲 夕霧 陽炎 有明 吹雪 霰雲 叢雲 不知火 薄雲 雨霧 朝霧

三一	三一	二七九	二七九	四〇〇	四四四	四四四	二七九	二七九	二七九	三八一	三八一	三八一
三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一	三一

- (解) ストロジエウオイ(二) 二四〇
- (沈) ステレグシイライ(二) 二四〇
- (解) ボイキー(一) 五五〇
- (沈) プールヌイ(一) 三五〇
- (解) グロズライイ(一) 三一〇
- (解) ウラストヌイ(一) 三一〇
- (沈) ウヌシテリヌイ(一) 三一〇
- (沈) ウイノスリウイ(一) 三一〇
- (沈) ウニマテリヌイ(一) 三一一
- (沈) ラジアシチ(一) 二四〇
- (沈) ラスロブヌイ(一) 二四〇
- (沈) シリヌイ(一) 二四〇
- (解) スコールヌイ(一) 二四〇
- (沈) ストラシヌイ(一) 二四〇
- (沈) ストフヌイ(一) 二四〇
- (解) スタートヌイ(一) 二四〇
- (沈) アイヌイ(二) 三三〇
- ブラーウイ(二) 三五〇
- (解) ストロジエウオイ(二) 一八九三—〇二
- (沈) ステレグシイライ(二) 一八九三—二
- (解) ボイキー(一) 一九〇〇—二
- (沈) プールヌイ(一) 一九〇〇—二
- (解) グロズライイ(一) 一九〇〇—二
- (解) ウラストヌイ(一) 一九〇〇—二
- (沈) ウヌシテリヌイ(一) 一九〇〇—二
- (沈) ウイノスリウイ(一) 一九〇〇—二
- (沈) ウニマテリヌイ(一) 一九〇〇—二
- (沈) ラジアシチ(一) 一八九三—〇二
- (沈) ラスロブヌイ(一) 一八九三—〇二
- (沈) シリヌイ(一) 一八九三—〇二
- (解) スコールヌイ(一) 一八九三—〇二
- (沈) ストラシヌイ(一) 一八九三—〇二
- (沈) ストフヌイ(一) 一八九三—〇二
- (解) スタートヌイ(一) 一八九三—〇二
- (沈) アイヌイ(二) 一八九三—〇二
- ブラーウイ(二) 一八九三—〇二

# 戦時日報

備考 上記の表には水雷艇及特務艦船を含まず

## ▲露國艦隊損害統計

	戦争に參與せしもの		沈没せしもの		捕獲せしもの		武装解除のもの		現存	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
戰艦	一五	一八〇、九八〇	三	一四、九五八	二	三三、二一〇	一	一三、九二二	一	一
裝甲巡洋艦	七	六三、五三三	五	三六、九七九	一	九、〇八六	一	一	二	二四、五五四
裝甲海防艦	三	一三、三二二	一	四、一六六	二	九、〇八六	一	一	二	二四、五五四
巡洋艦	三	六五、四二六	六	二六、四二二	一	一	五	三九、二二五	一	九、九六〇
其他の軍艦	△三	七六、七九三	一四	三五、三三三	一	一一、七〇〇	二	一一、四四九	〇	二八、四三三
驅逐艦	三	一〇、三九〇	一九	五、六六六	二	五九〇	二	三、三四	三(?)	七〇〇
計	九三	四〇、三三四	五七	二四、五、三九二	七	四、四八六	一九	五、八八〇	二〇	六三、六六六

備考 上記の表には水雷艇及特務艦船を含まず△印の内には假裝巡洋艦を含む。印の内には所在不明にして既に東洋を距りたる如きものを含む

戰時日表

陸軍

海軍

(特に地名を掲げざるものは皆旅順口なり)

明治三十七年

二月 八日  
 二月 九日  
 二月十四日  
 二月廿四日  
 三月 六日  
 三月 十日  
 三月廿二日  
 三月廿七日  
 三月廿八日  
 四月十二日  
 五月 一日  
 五月 五日  
 五月 六日  
 五月 七日

定州占領(韓國)

鴨綠江戰▲九連城攻撃

第二軍上陸

鳳凰城占領

寬興縣占領▲三十三里堡、鐵道破壊

旅順口襲撃

第一次旅順口攻撃▲仁川沖海戰

第二次旅順口攻撃

第三次旅順口攻撃▲第一次港口閉塞

第一回浦港攻撃

第四次旅順口攻撃

第五次旅順口攻撃

第六次旅順口攻撃▲第二次港口閉塞

第七、八次旅順口攻撃

鴨綠江威嚇砲撃

五月 十日 敵安州を襲ふ  
 五月十二日 普蘭店鐵道破壞  
 五月十三日 普蘭店鐵道破壞  
 五月十四日 十三里臺占領  
 五月十五日 十三里臺占領  
 五月十六日 十三里臺占領  
 五月十九日 肖金山戰鬪 ▲野津軍上陸  
 五月二十日 王家屯衝突

陸軍

五月廿五日 雙陽邊門占領  
 五月廿六日 雙陽邊門占領  
 五月廿七日 雙陽邊門占領  
 五月廿八日 雙陽邊門占領  
 五月三十日 雙陽邊門占領  
 六月 四日 雙陽邊門占領  
 六月 六日 雙陽邊門占領  
 六月 七日 賽馬集占領

旅順要塞陸戰

金州攻撃開始  
 金州占領南山攻陷  
 南關嶺占領  
 柳樹屯及ダルニー占領  
 案子山、臺子山線占領  
 乃木軍師司令部上陸

海軍

大密口掃海  
 掃海續行 ▲宮古艦沈没  
 掃海續行 ▲吉野、初瀬、八島三艦沈没  
 蓋州角砲撃  
 砲艦、驅逐艦の強行偵察  
 封鎖宣言 ▲分道艦隊南山攻撃應援  
 砲艦及驅逐艦強行偵察  
 敵掃海決行、一隻水雷に罹る  
 砲艦の強行偵察  
 艦載水雷艇の強行偵察 ▲蓋州砲撃



六月 八日 岫巖占領  
 六月 十日 岫巖占領  
 六月十二日 懷仁縣占領  
 六月十三日 懷仁縣占領  
 六月十四日 懷仁縣占領  
 六月十五日 得利寺戰鬪  
 六月十八日 得利寺戰鬪  
 六月廿四日 大山大將滿洲軍司令官に、  
 兒玉大將同總參謀長に補す  
 熊岳城占領  
 六月廿三日 三道河占領  
 六月廿四日 三道河占領  
 六月廿六日 分水嶺の占領  
 六月廿七日 分水嶺の占領  
 七月 三日 摩天嶺逆襲  
 七月 四日 摩天嶺逆襲  
 七月 六日 城廠占領  
 七月 八日 蓋平占領  
 七月 九日 蓋平占領

劍山占領

劍山逆襲(戰鬪三日)

第四驅逐隊の營城子双臺溝附近砲撃  
 強行偵察、機械水雷沈置  
 驅逐隊及水雷艇隊襲撃  
 浦鹽艦隊我運送船を襲撃す  
 敵艦出戰約三十分遁入  
 敵驅逐艦二隻沈没  
 敵艦大舉出戰港内に敗退  
 水雷艇隊哨艦を襲撃す  
 第六艇隊の夜襲  
 敵艦出戰港内に敗退

水雷艇隊の夜襲

第十四艇隊敵驅逐艦二隻を沈む

龍王塘附近掃海隊の苦戦

敵艇龍王塘附近より砲撃す

我偵察艇隊鮮生角附近に敵艦隊と戦ふ

仙家峪占領

摩天嶺再度の逆襲

橋頭附近の戦闘

城廠再占領

敵三たび摩天嶺を襲ふ▲盤嶺占領

太平嶺の陣地を取り大石橋に迫る

大石橋占領、營口占領

營城子偏石柳子附近大白山附近占領

長嶺子英名石線占領

敵軍圍廓内に遁入す

敵自ら水師營を焼く

- 七月 十日
- 七月 十一日
- 七月 十七日
- 七月 十九日
- 七月 廿一日
- 七月 廿二日
- 七月 廿四日
- 七月 廿五日
- 七月 廿六日
- 七月 廿七日
- 七月 廿八日
- 七月 三十日
- 七月 卅一日
- 八月 一日
- 八月 三日
- 八月 五日
- 八月 六日

- 拆木城占領
- 榆樹林子様子嶺占領
- 海城牛莊線占領

大孤山占領

小孤山占領敵の逆襲撃退

敵艦我陣地を砲撃す

黄海大海戦

通寶驅逐艦一隻芝罘に入る  
蔚山沖海戦▲通寶艦二隻上海に入る

千大山より小東溝北方高地及隋家屯西方高地に亘る線占領  
碾盤溝南方及小東溝東北高地占領

降伏の勧告

勸降拒絶

第一回本線總攻撃

石板橋北方標高一七四高地占領

刺垂溝北方高地占領

敵艦グレミヤーチー爆沈

樺太コルサコフ海戦

日進春日の嶗嶗砲臺砲撃  
老鐵山東に敵驅逐艦二隻機械水雷に罹る

城頭山下に敵持種掃海艇爆沈

野砲及海軍砲の敵兵營威嚇砲撃

遼陽攻撃開始

- 八月 八日
- 八月 九日
- 八月 十日
- 八月 十二日
- 八月 十四日
- 八月 十五日
- 八月 十六日
- 八月 十七日
- 八月 十九日
- 八月 二十日
- 八月 廿一日
- 八月 廿二日
- 八月 廿三日
- 八月 廿四日
- 八月 廿五日
- 八月 卅一日
- 九月 二日

九月 九日  
九月十一日  
九月十三日  
九月十五日  
九月十八日  
九月十九日  
九月二十日  
九月廿一日  
九月廿七日  
九月三十日  
十月 二日  
十月 七日  
十月 九日  
十月 十日  
十月十一日  
十月十二日

沙河の大逆襲

對クロバトキン砲臺の坑道作業  
敵壘前五十米突に達す  
水師營南方對壕作業敵壘前七十  
米突に達す

強行偵察 ▲敵連日掃海  
強行偵察  
平遠艦沈没

第二回本線總攻撃  
クロバトキン砲臺及水師營南方  
の六壘を取る二〇三高地未だ陥  
らず

二〇三高地激戦  
二龍山砲臺の攻路に向ひ敵砲火  
集注  
本日より連日敵艦砲撃

東鷄冠山攻路逆襲  
本日に至るまで敵艦砲撃の結果  
見るべきものあり

東鷄冠山對壕作業に對する逆襲  
龍昭南方鐵道橋附近占領  
大口徑砲の敵艦射撃

十月十三日  
十月十四日  
十月十五日  
十月十六日  
十月廿二日  
十月廿四日  
十月廿六日  
十月廿七日

九日以來沙河の大會戰全勝

巨彈ベレスウェットに火災を起さ  
しむ  
大口徑砲松樹山に命中す

鉢卷山砲壘及二龍山中復甄壕占  
領  
大口徑砲の敵艦及機器局砲撃

旅順市街火災起る(砲撃の爲)

大口徑砲、攻城砲及海軍砲の松  
樹山、二龍山、東鷄冠山及軍艦  
機器局砲撃

砲撃續行 ▲東鷄冠北砲臺凸角部  
外穹窿の一部破壊

海軍砲の西太陽溝、椅子山、案  
子山、東港内の軍艦機器局及旅  
順舊市街砲撃 ▲大口徑砲攻城砲  
の二〇三高地砲撃

砲撃續行  
第三回本線總攻撃

大口徑砲及海軍砲の港内及造船  
所砲撃 ▲東鷄冠山北砲臺東部斜  
面占領  
大口徑砲旅順西港市街射撃

十一月 一日

十一月 二日  
十二月 三日  
十一月 六日  
十一月 十九日  
十一月 廿二日  
十一月 廿六日  
十一月 三十日  
十二月 二日  
十二月 三日  
十二月 六日  
十二月 七日  
十二月 八日  
十二月 九日  
十二月 十一日  
十二月 十二日  
十二月 十三日  
十二月 十四日

市街射撃續行  
東港大火災  
火藥庫爆發  
機器局附近射撃  
機器局附近大火災  
第四回本線總攻撃  
二〇三高地強襲占領  
一部休戦  
海軍砲の敵艦射撃  
赤阪山占領▲五時間休戦  
大口徑砲の敵艦射撃益成功  
敵艦射撃續行  
敵艦射撃續行  
敵艦以下八隻全く戦闘力を失ふ  
老虎尾機器局、魚雷營附近及船艦射撃  
水雷艇隊のセバストポリ襲撃  
水雷襲撃續行

十二月十五日  
十二月十六日  
十二月廿一日  
十二月廿二日  
十二月廿四日  
十二月廿八日  
十二月卅一日  
明治三十八年  
一月 一日

東鷄冠山北砲臺占領  
後三羊頭村北方高地及西方半島高地占領  
後三羊頭村及小房村大劉家屯の占領  
二龍山砲臺占領  
松樹山砲臺占領  
水雷襲撃續行  
セバストポリ終に戦闘力を失ふ

旅順H砲臺、盤龍山新砲臺を奪取す、午後九時關東要塞區司令官ステツセルより開城に關する書受領  
零時三十分東鷄冠山及保壘N及M兩高地占領、午後九時四十五分開城規約の本調印を終る  
遼東射撃の解除  
敵牛莊に來襲共站部包圍悉く撃退  
乃木大將入城式舉行  
敵黑溝臺及沈且堡に前進我軍攻撃に轉じ、沈且堡の敵を撃退し黑溝臺附近に於て彼我交戰中  
我軍柳條口附近を占領し敵の逆襲を撃退、黑溝臺の北方約一里菲菜河子附近占領沈且堡黑溝臺方面の敵渾河右岸に退却、李家窩棚及黑溝臺の南約二里占領



一月廿九日 黑溝臺占領  
 二月 二日 黑溝臺戰繼續中  
 二月 九日 張起寨南方高地占領  
 二月十三日 沙河方面全體の敵漸く動く  
 二月十九日 三月十九日より三月十日に至る最右翼軍始めて運動を起し、全線活動して奉天附近の大會戦となり、三月十日奉天を占領す  
 三月十一日 營盤占領  
 三月十三日 興京占領  
 三月十九日 開原占領  
 三月廿一日 昌圖占領  
 三月卅一日 綿花街占領  
 四月 三日 雌鷺樹及四面城占領  
 四月 五日 孤榆樹占領  
 四月十二日 蒼什占領  
 四月十四日 八家子占領▲英額城占領  
 四月十五日 通化占領  
 五月 一日 通化方面より北進せる兵團釣魚臺に達す  
 五月 四日 八寶屯占領(奉化方面)

五月 九日 敵英額城に來襲す  
 五月廿七日 沖の島附近に於て大海戦中  
 五月廿八日 沖の島附近大海戦大捷を博す  
 六月廿六日 北韓軍輸城占領  
 七月 七日 北遣艦隊樺太に達す  
 七月 八日 樺太上陸軍コルサコフ占領  
 七月 十日 樺太上陸軍ウラジミロフカ、ブリジ子ユ占領  
 七月十七日 上村艦隊雄基灣砲撃  
 七月廿三日 北遣艦隊先發隊アレキサンドロフキー上陸地點掃海  
 七月廿四日 アレキサンドロフスキー占領▲北韓軍富寧及富居附近占領  
 七月廿五日 ツーエ占領▲デルベレスコエ占領  
 七月卅一日 殘敵降伏樺太全島平定

戰時ノ財政

### 戦時の財政

始め露國が滿洲撤兵を實行せざるや、我政府は到底事を樽俎そんその間に決すべからざるを察し、豫め軍備を補充するの必要を認め、明治三十六年十二月二十八日を以て緊急勅令を奏請し、財政上必要の處分を爲せり。我政府は此時より平時の状態を脱して戦時財政の端を啓けり、其處分左の如し。

- 一、政府は一時借入金爲し得ること
- 二、特別會計に屬する資金を繰替使用すること
- 三、國庫債券を發行すること

此緊急勅令に因りて翌三十七年四月臨時證會の開會までに軍事費として收入せし金額及財源左の如し。

軍資金

一五五、九七一、〇三五<sup>円</sup>

内 公債、國庫債券及一時借入金 一三〇、九七一、〇三五  
 特別會計資金繰替 二五、〇〇〇、〇〇〇

而して三十七年四月の臨時議會に於て其後の軍事費として收入せし金額及其財源は左の如し。

軍資金 三八〇、〇〇〇、〇〇〇<sup>円</sup>

國債及借入金 二八〇、〇〇〇、〇〇〇

内 特別會計繰入 三〇、〇〇〇、〇〇〇

一般會計繰入 七〇、〇〇〇、〇〇〇

然るに戦争は局面意外に開展し、軍資金の必要益大なるに至りしかば、政府が三十七年末の通常會議に追加要求したる軍事費は非常の巨額に達したり、即ち左の如し。

軍資金 七〇〇、〇〇〇、〇〇〇<sup>円</sup>

内國債及借入金 五七一、〇〇〇、〇〇〇<sup>円</sup>

一般會計繰入 一一九、〇〇〇、〇〇〇

内 特別會計資金繰入 八、〇〇〇、〇〇〇

軍資獻納金 一、五〇〇、〇〇〇

雜收入 五〇〇、〇〇〇

加之右の豫算にて尙不足を免れざりしを以て、政府は三十八年八月更に緊急勅令を奏請して三億圓の外債を募集せり。故に三十六年末に於ける財政上の緊急處分以來軍事費として政府の要求せし金額の累計及其財源は左の如し。

軍資金 一、五三五、九七一、〇三五<sup>円</sup>

國債及借入金 一、二八一、九七一、〇三五

一般會計繰入 一八九、〇〇〇、〇〇〇

内へ特別會計資金

六三、〇〇〇、〇〇〇

軍資獻納金

一、五〇〇、〇〇〇

雑収入

五〇〇、〇〇〇

九〇

其他政府は臨時事件費に充つべき豫備費として三十七年度の一般會計に四千萬圓、三十八年度の一般會計に八千萬圓を計上せるを以て、此等を合計する時は十六億五千六百萬圓に達すべし。

参考

明治三十六年度施行豫算

二四九、〇〇〇、〇〇〇

昭和十年度豫算

二、二一五、〇〇〇、〇〇〇

戦に因める  
明治天皇及昭憲皇太后御製御歌

日露戦役に因める御製御歌

明治天皇

吹上のそのふの花をいかにぞと

問ふ日もなくて春のくれゆく

夏しらぬこほり水をばいくさ人

つどへるにはにわかちてしがな

いはがねのこゞしき山をてる日にも

たゆまずこゆるわが軍人

つかひせし人のかへるをまちつけて

軍のにはのことこそ問へ

おもふこと多かる頃のならひとて  
常にはみざる夢をみしかな

國をおもふみちにはふたつなかりけり

軍の場にたつもたゝぬも

國の爲めたふれし人を惜むにも

思ふは親のこゝろなりけり

かぎりなき世にのこさむと國の爲

たふれし人の名をぞとどむる

事有るにつけていよゝ思ふかな

民のかまどの煙いかにと

戦のいとまある日はものゝふも

言葉の花をつむとこそきけ

いくか経てかへしはつべき小山田こやまに

立てる男の子數のすくなき

むかしよりのためしまれなる戦に

おほくの人をうしなひしかな

さまざまにももの思ひこし二年は

あまたの年を経しこゝちする

昭憲皇太后御歌

もろこしの畑の高きびふく風に

霜ちるよはの寒さをぞ思ふ

國のためいたでおふ身のうつしゑは  
みるに涙ぞもよほされける

戦の友のかばねをふみ越えて

すゝむこゝろや苦しかるらむ

たゝかひのかちのたよりをきく毎に

み軍人の身をおもふかな

いまたえむいきの下より萬代を

うたふときくに涙こぼれぬ

たゝかへばかつが常なる皇軍も

なほいかにかとおもふ時あり

乃木將軍其他ノ詩歌



陣中作

東西南北幾山河  
征戰歲餘人馬老

乃木希典

春夏秋冬月又花  
壯心猶此不思家

爾靈山

爾靈山險豈難攀  
鐵血覆山山形改

乃木希典

男子功名期克難  
萬人齊仰爾靈山

夢陷旅順城賦示乃木將軍

百彈激雷天亦驚  
精神到處堅於鐵

山縣有朋

包圍半歲萬屍橫  
一舉直屠旅順城

陣中作

稀<sup>まれ</sup>有<sup>に</sup>楊柳<sup>ようりゆう</sup>無<sup>く</sup>竹梅<sup>ちくばい</sup>  
飛<sup>ひ</sup>雲<sup>うん</sup>塞<sup>さい</sup>下<sup>か</sup>尚<sup>なほ</sup>氷<sup>こ</sup>雪<sup>せつ</sup>

乃木希典

滿<sup>まん</sup>洲<sup>しゅう</sup>春<sup>しゅん</sup>色<sup>しき</sup>又<sup>また</sup>奇<sup>き</sup>哉<sup>や</sup>  
何<sup>いづれ</sup>日<sup>のひ</sup>東<sup>とう</sup>風<sup>ふう</sup>渡<sup>わた</sup>海<sup>うみ</sup>來<sup>きた</sup>

金州城外

山<sup>さん</sup>川<sup>せん</sup>草<sup>そう</sup>木<sup>もく</sup>轉<sup>くわん</sup>荒<sup>こう</sup>涼<sup>りやう</sup>  
征<sup>せい</sup>馬<sup>ば</sup>不<sup>ず</sup>前<sup>まへ</sup>人<sup>ひと</sup>不<sup>か</sup>語<sup>たらず</sup>

乃木希典

十<sup>じゅう</sup>里<sup>り</sup>風<sup>ふう</sup>腥<sup>せい</sup>新<sup>しん</sup>戰<sup>せん</sup>場<sup>じやう</sup>  
金<sup>きん</sup>州<sup>しゅう</sup>城<sup>じやう</sup>外<sup>がい</sup>立<sup>た</sup>斜<sup>しゃ</sup>陽<sup>やう</sup>

凱旋

王<sup>おう</sup>師<sup>し</sup>百<sup>ひやく</sup>萬<sup>まん</sup>征<sup>せい</sup>驕<sup>きやう</sup>虜<sup>らふ</sup>  
愧<sup>はづ</sup>我<sup>われ</sup>何<sup>なん</sup>顔<sup>のかん</sup>看<sup>はせ</sup>父<sup>ありて</sup>老<sup>かろう</sup>

乃木希典

野<sup>や</sup>戰<sup>せん</sup>攻<sup>こう</sup>城<sup>じやう</sup>屍<sup>しかばね</sup>作<sup>な</sup>山<sup>さん</sup>  
凱<sup>がい</sup>歌<sup>か</sup>今<sup>こん</sup>日<sup>にち</sup>幾<sup>いく</sup>人<sup>にん</sup>還<sup>かへ</sup>

旅順陣中作

鐵<sup>てつ</sup>壁<sup>ぺき</sup>金<sup>きん</sup>城<sup>じやう</sup>逐<sup>ちく</sup>次<sup>じく</sup>摧<sup>たい</sup>  
三<sup>さん</sup>千<sup>せん</sup>北<sup>ほく</sup>陸<sup>りく</sup>貔<sup>ひ</sup>貅<sup>きゆう</sup>士<sup>し</sup>

一戸兵衛

旭<sup>きよく</sup>旗<sup>き</sup>所<sup>ところ</sup>向<sup>むか</sup>悉<sup>しつ</sup>排<sup>はい</sup>開<sup>かい</sup>  
一<sup>いち</sup>躍<sup>やく</sup>先<sup>まづ</sup>屠<sup>ほ</sup>四<sup>し</sup>砲<sup>ぱう</sup>臺<sup>たい</sup>

寄征露諸將

大山元帥

帝<sup>みか</sup>御<sup>ご</sup>法<sup>はふ</sup>宮<sup>きやう</sup>親<sup>しん</sup>授<sup>じゆ</sup>刀<sup>たう</sup>  
大<sup>たい</sup>山<sup>ざん</sup>不<sup>ふ</sup>動<sup>どう</sup>名<sup>な</sup>爲<sup>な</sup>實<sup>じつ</sup>

横堀鐵研

勅<sup>みこと</sup>云<sup>のり</sup>努<sup>する</sup>力<sup>ちから</sup>頼<sup>たの</sup>卿<sup>しやう</sup>曹<sup>そう</sup>  
維<sup>これ</sup>石<sup>いしが</sup>巖<sup>がん</sup>巖<sup>いふ</sup>仰<sup>ほい</sup>彌<sup>い</sup>高<sup>たか</sup>

同

絶<sup>ぜつ</sup>海<sup>かい</sup>懸<sup>けん</sup>軍<sup>ぐん</sup>伐<sup>さく</sup>朔<sup>さく</sup>胡<sup>こ</sup>  
天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>有<sup>あ</sup>命<sup>めい</sup>賚<sup>あ</sup>車<sup>しや</sup>馬<sup>ば</sup>

同

多<sup>た</sup>君<sup>きみ</sup>統<sup>とう</sup>帥<sup>しゆ</sup>贊<sup>さん</sup>英<sup>えい</sup>謨<sup>ま</sup>  
恩<sup>おん</sup>遇<sup>ぐう</sup>如<sup>ごと</sup>斯<sup>きは</sup>今<sup>こん</sup>古<sup>こ</sup>無<sup>な</sup>

兒玉大將

破敵長驅勢捲席  
見幾轉瞬捷如神

同

幕中獨畫縱橫策  
人道東洋毛爾刺

黒木大將

陰雲低亞碧油幢  
十萬神兵自天降

同

鐵騎宵過鴨綠江  
落梅一曲慘胡腔

東郷大將

艤艦蔽海壓強隣  
已扼咽喉擣其背

同

乍制機先驚鬼神  
涅留遜後有斯人

同

水雷乘夜破驕胡  
提督醉歌迂亦甚

同

胡后驚悲死復蘇  
祖鞭一著已輸吾

乃木大將

砲聲纒罷氣淒涼  
此地雖然瘞忠骨  
戰後山河草木荒  
塞旗擒將人安在  
砲煩如雷天地震  
將軍祇恐損兵多

同

血海屍山百戰場  
蚤知毅魄奪遼陽  
將軍下馬酌斜陽  
暴暴寒雲七里莊  
金湯喚作東洋鎮  
一舉何難降旅順

長谷川大將

角聲破曉起牙營  
胡虜雖豪非我敵

同

肅肅貔貅度水行  
一呼直拔九連城

野津大將

英姿颯爽壓全球  
立馬遼陽城上夕

同

閩外膚公照萬秋  
浮雲落日鄂羅州  
(露國を昔鄂羅西亞といふ)

奥大將

一呼吸裏拔南山  
大石橋邊徐飲馬

同

逐北長驅破鐵關  
鄂羅天地落眉間

廣瀬中佐の戦死を

散るために咲いてくれたか櫻花

海軍少將 爐雪

悼廣瀬中佐

才兼文武膽輪函  
此日青山送靈柩

芹澤刀川

一死精忠哭鬼神  
行人墮淚落花春

旅順口閉塞歌

動地驚天策  
誰識男子膽

廣瀬武夫

沈船塞敵艦  
笑入死生間

正氣歌

死生有命不足論  
奮躍赴難不辭死  
一世義烈赤穂里  
憂憤投身薩摩海  
或爲芳野廟前壁  
或爲菅家筑紫月  
可見正氣滿乾坤  
嗚呼正義畢竟在誠字  
誠哉誠哉斃不已

廣瀬武夫

鞠躬唯應酬至尊  
慷慨就義日本魂  
三代忠勇楠子門  
慷慨就義小塚原  
遺烈千年見鏃痕  
祠存忠勇不知冤  
一氣磅礴万古存  
嗚呼何必要多言  
七生人間報國恩

旅順口閉塞

風烈遼東野  
健兒探虎窟

廣瀬勝比古

月寒旅順灣  
談笑死生間

三月奉天戰

對峙兩軍今若何  
奉天城外三更雪

山縣有朋

戰聲恰似迅雷過  
百萬精兵渡大河

悼橋中佐

烈日秋霜泣鬼神  
忠魂赫赫照千歲

秦山伯爵 土方久元

率先獅進一軍振  
長護楓宸祝此辰

從二位勳一等子爵 杉 孫七郎

鮮血灑來三尺刀

斬人如草氣何豪

巍巍天半雲泉岳

不及殊勳萬古高

昭和十年四月十日 印刷  
昭和十年四月十五日 發行

東京市京橋區築地一丁目十八番地

東邦社代表者

山 元 昇

編輯兼  
發行者

東京市葛飾區小菅町一二八四番地

印刷者 竹 田 益 平

東京市京橋區築地一丁目十八番地

發行所 東邦社國威宣揚事業部

同頒布所

東京市麴町區九段一丁目五番地

頒布所

財團 軍人會館 (物品紹介部)

振替口座 (東京二、〇〇七番)

不 許  
複 製

終

終